

二人『ハハハハハハハ』

◇
【江口渙宛・九月十一日】
いよいよお別れとなつた。

この度の事はいふに及ばず、那須に於いて、其他に於いて、一方ならぬ御世話になつた事を、此處に改めて、厚く御禮を云ふ。

同志諸君は控訴しろと切りに勧めてはくれるが、僕はそんな事はせずに、此ままじりじりの死刑へと旅立つ考へである。若し僕の貧弱な體が「じりじりの死刑」に長らく持ち耐へて、新らしき社會への第一歩と共に、よろよろと地獄の底から飛出す事が出来れば、此處もとのおなぐさみ……よろしく御喝采を……といふ譯けである。

村木既に病死し、古田君今將に縊られんとしてゐる。そして僕は生き残つて、死に通ずる一本の闇路を猶ほ何ヶ年間か歩み続けようとしてゐる……命さへあれば、トンネルの頭の上の土が急に崩れて、再び地上へ出られる時が來るといふ考へに浸りながら……。

しかし、此の同じ地下の歩みを歩みつゝあるものは、僕等囚徒のみではない。多少の色合の差こそあれ、多くの労働者の生活は、やはり此の歩みに外ならない。が、彼等には、自らの力によつて頭上の地に穴を明けける喜びがある。戦ひのよろこびがある。しかし、僕はただ、上か

ら穴をあけてくれるのを待つばかりだ。自らには何んの力もない。闘ひの喜びがない。残された、そして、僕のなさねばならぬ唯一の闘ひは、病ひと衰弱とに對する（肉體的及び精神的の）身、自らの體内の闘ひのみである。

僕の、今後の「闘争」はこれだ。僕は、この闘ひを闘ひつつ、生きてゐやう——。

昨日、加藤一夫君が面會に來てくれたの話しに、近く「やまと新聞」へ長篇を載せらるる由慶賀〜。創作方面にも、大いに沈黙を破つて乗り出して欲しい。

加藤君にも頼んで置いたが、鐵君の詩集は一つ大盡力を願ふ。（大不景氣とは聞いてゐるが）どうも、あれは僕の責任が残つて居る様に思へて仕方がないので、宜敷お願ひする。

來る十八九日頃に囚衣を着る。監獄は、たぶん、千葉か小菅だらうとの事である。では左様なら……皆さん御壯健で……。

◇
【堺利彦宛・九月十一日】

いよ〜僕の一等嫌やだと思つてゐた「無期」に決定しました。が、控訴はしません。社の連中はしきりに控訴をすゝめてくれるし、山崎辯護士は『君の意志はどうあらうとも、僕は辯護士として控訴する』と言つてくれる。社の連中の氣持は嬉しく受け、伯爵の法律に對する確信は大いに尊敬するのでありますが、僕としては裁判に少しも氣乗りがなく、且つ皆んなにだ

らくといつまでも御世話を受くるのも心苦しく思ふのです。殊に古田君は控訴しますまいから、古田君が自分の直ぐ傍で縊らるゝのを知りながら、自分は控訴してそれを見てゐるに堪えないんですよ。氣持がね……。

それに、最初あれほど嫌やだった無期が——尤も今だつて嫌やに違ひないが——此頃では「十五年、二十年といふ刑と無期となら大した違ひもあるまい、どうでもいいや」といふづぼらな氣になつてしまつた事です。有期と無期とでは、精神的に（氣持の上にも）大いに相違しようとは思ひますが、しかし、それと同時に、人間の精神といふ奴は、可なりな程度にまで、自分の意志欲望といふものに左右せられるから、その處も謂ゆる「氣の持ちやう」といふ奴で多少の加減は出来ようと、ぐうたらな考へをしてゐます。それに「空想」といふ奴も、斯ういふ場合には多少役に立ちますからな——。呵々。

さて、斯うなつて來ると、いつかお約束した「日向ぼつこ會」も少々空想の霞がかかつた様な感のないでもありませんな。僕の思ふのに、貴君も少なくとも今後「十五年間」は生きてゐて下さらないといけませんよ。僕も今から「十五年間」は、何んとかして、衰弱と病氣とに（肉體的にも精神的にも）苦闘しながら一生懸命生きてゐようと思つてます。『日向ぼつこ會』といふすばらしい理想のために……。

それでもまだ敵の社會が續いてゐるなら、先づ其の邊で生きてゐる事を失敬したいと思ひま

すよ。尤もそこまで命が持ち堪えたら『なアにもう一二年、もう一二年』なんてな事にきつとなるんでせうが……僕の様な凡人は。呵々。

赤になつたら、またぼつ／＼英語と數學とをやりたいと思つてゐます。英語と數學が、一步進んで行けば、そこに自分の『生きて行く』といふ氣持が、よりよく自覺されようと思つてね。

それに、新しい社會には、統計が……従つて數學が……最も大切だと思ふから、僕の數學が實を結んで、しかもそれがその時の役に立つ……てな、殊勝氣な夢もあつてね。ハツハツハツ。まあどうかして麥飯で英數を釣り上げたいものです。

昨日の公判で、山崎辯護士は『判決を受けた直後の感想』を書いてくれと云つて、僕等に紙と鉛筆を渡しました。で、僕は、判事が判決文の前段をくださしく讀み上げてゐるうちに、秋雨の音をきながら獨り句作に耽つてゐました。そして、言渡しの濟んだ時には、確か三句ほど書きつけてゐました。今は忘れてしまつて思ひ出せません、その句を。

秋雨を 餞け ける 別れ かな

これは、その日歸つてから作つた句です。歸りの自動車の中では、

見納めの 街は 秋雨 晝 灯

と駄句りました。下るまでには、まだ／＼メイ句が吐けさうです。

控訴期間は十七日までです。十八日か十九日には下ります。小菅か、千葉か、甲府のうちだらうといふ事です。

爲子夫人にも、眞柄さんにも、別信は出しません。いろ／＼有難うございました。厚く御禮申し上げます。

◇

【奥山伸宛・九月十四日】

謹啓、時下残暑猶去難しと雖も月明既に秋冷を湛え蟲聲滋々として鐵窓に入るの好期と相成申候處、尊臺益々御清適奉大賀候。

野生裁判の結果は去十日無期と決定、兩三日中には終身囚として何處かの獄に送らるゝ運命と相成候。

今日迄、小生の先生に受けたる恩義の深さ身に泌みて忘れ難く、思ひ出づる毎に感涙の停まざるもの有之候。即ち永別にのぞみ此情を述べ一片以て御挨拶申上候。早々敬白。

◇

【労働運動社宛・九月十四日】

岩佐君

では……。

大奮闘の由、大いに嬉しい。是非、百姓運動専門の、いゝ青年を見出してくれ。このかんらんの人が少ない。君の力に待つこと大なり、だ。

千葉からの手紙は嬉しかった。十八の意氣で生きてゐるから安心してくれ。

和田榮太郎君

いよ／＼最後のお別れとなつた。約束のものは、濟まないが書けなかつた。許してくれ。たぶん、四五日のうちには何處かへ送られる事になるだらう。

今日は、氣持ちのいゝ秋晴だ。囚人にとつて、空ほど綺麗なものはない。

俺は生きてゐるよ。麥飯で健康を釣つて見るつもりだ。君は、急がず、がつしりと大地を歩んで進んでくれ。健闘を祈つてゐる。

近日、「筆記もの」を藤間へ宅下げする中に君宛のものも一綴ぢある。本からの抜き書に過ぎないが、何かの役に立てば幸甚だ。ぢや、さよなら。

古河三樹松君

さよなら、古河君。どうかあせらずに、落ちついて、根強く、しつかりと運動してくれ。

日本人の性格で、一等缺乏してゐるのは根強さだ。僕は自ら顧みて、其の點を常に耻かしく

感じてゐる。これは、君に對して根強さが不足だといふのではない。吾々には常に根強さが不足だといふことを言ひたいのだ。

お氣嫌よう。

川口慶助君

いよ／＼お別れが来た。

僕は君が、君の性格に最も適する運動方法を擲んで、一路を進んだなら……と思ふ。

燕去り、雁來り、蟲地中に入り、久太赤煉瓦の底に餘生を投ず、か。

秋天高く、一片の浮雲なし、豁ッ、豁ッ、喝ッ——。

◇

【望月家宛・九月十四日】

望月桂君

いよ／＼お別れとはなりにけりだ。お互ひに、御坐なりを言ひ合つてもしかたがないし、言ふべき事は、訊くべき事は、大底お互ひの腹の中で分りすぎる程分つてゐるんだ。さう思ふと何んにも書くべきことはない。君には、僕が死んでから後の事まで頼んであるんだから……。ただ、いろ／＼御世話になつた事、今後も猶ほ御世話にならなければならぬ事に就いて、

衷心からの御禮を言つて置きたい。

僕は、あの事件後は一切誰れにも會はれまいと思つてゐたのだ。それが一年近くの間、面會に手紙に、其他着るものから身の廻り一切のものにまで、望月家の手厚い世話をして貰つたのだ。全く嬉しかつたよ。近日も一度會ひに来てくれるさうだナ。この間の時は我儘を言つて濟まなかつた。許してくれ。

此の上はウンと馬鹿になつて、生きられるだけは生きてゐるつもりだ。君もますます／＼禿げて、ますます／＼ニコ／＼してゐてくれ。

望月福子様

福子さん、とう／＼お別れがやつて來ました。お禮を言はねばならぬ事が餘りに澤山ありますが、ただ「有難う……」でまけておいて下さい。

此の上は、僕も生きてゐられるだけは、馬鹿になつて、氣樂に生きてゐますよ。貴女もどうか、いろんな雑事をしながら、好きな歌でも靜かに唱つて、愉快に暮らしてゐて下さい。僕に命さへあつたら、きつと再びお會ひの出来る時が來ると僕は信じてゐます。お爺さんお婆さんになつて、一緒に又、何處かへ見物にでも行くやうな時がある様な氣がしますね。ハハハ、。、。まア、そんな事でも空想しながら、ニコ／＼生きてゐますから、安心して下さい。

『國文の解釋』を郵送しましたが着きましたか。くだらない本ですけれど、僕が監獄の中で買った本だから、記念のために差上げます。又、僕の歌と句との手控や、いろんな人の詩歌俳句のぬき書きなども宅下げしましたから、近藤君から貰つて下さい。貧弱な形見です。

望月君に僕の引受人になつて貰ふことにしましたから、二ヶ月目に一度づつ手紙で消息を告げ合ふことの出来る様になつたのを嬉しく思ひます。せいふく皆んなで、僕の命の薬になる様な音信を下さい。呵々。

今日は氣持の好い秋晴れです。鳩が舞ひ、蜻蛉が飛んでゐます、あまり、くさくさと物事を考へ過ぎさず、體を大切に願ひます。では、さよなら……………

キミチヤン

イツモ、メンカイニキテクレテ、アリガトウ。サイバンニモ、キテクレテ、アリガトウ。カワイイ、ニコニコシタカホヲミセテクレテ、アリガトウ。キユウオヂサンハ、モウキミチヤンニアワレナイトコロへ、イツテシマイマス。ケレド、モシ、キユウオヂサンノコトガ、シリタイトオモツタトキニハ、キミチヤントコロオニハヘクル、チヨウチヨウヤ、スズメニキイテゴラン。キツト、オシエテクレルカラ。ケレド、ドウシテ、ソナトコロヘイツタノカハ、オシエテクレナイヨ。ソレハ、キミチヤンガ、オホキク、オホキク、ナツタラ、ヒトリデニワカリ

マス。マコチヤンガスグカヘツテシマツテ、キミチヤンモ、サミシイダロウ。サヨウナラ。キツス。キツス。

キユウ

◇ 【伊串英治宛・九月十五日】

いよ／＼お別れだ。控訴をせずに直ぐ下がる。君は『何故に控訴しないか?』と聞き返す程の野暮天ではないと考へるから、敢へて説明はしない。

此の上は、ただ止むを得ざる横着を極め込んで、萬事『あなた様』に身をお任せするより仕方がない。だが、僕の信ずる『あなた様』は、天にまします『あなた様』や、西方淨土の『あなた様』であらう筈がない。それは今將に最も意義ある歴史的飛躍を齎らさんと爲しつつある『労働階級の力』である。

今年も秋になつた。天高く、労働者瘦するの候である。が、僕は入獄以前よりも却つて肥え太り、丈夫になつてゐる。さて、どれだけ生きられるか……まさか一年や二年でへたばりもすまい。安心してくれ。

空は晴れ渡つてゐる。秋の氣は澄み渡つてゐる。百舌鳥がなく、桐の一片が落ちる……古田君はいま何を考へてゐるだらう……

奮闘を望み、健康を祈る。慾の深い注文だねえ、ハツハ……さらば!!

【藤田浪人宛・九月十六日】
いよ／＼お別れとなつた。

控訴して死刑にしろと云つて見たところで、始まらない。男らしく、笑つて言ひ値通りに買つてやる事にした。假りに控訴して、辯護士諸君の御骨折で、却つて二十年、十五年の有期になつたところで、大した相違もなからう。十五年も辛棒してゐる間には、世の中も少しは目鼻が付いて來やうぢやないか。

耳元へ寄せてくる波の音をぢつと待ちつつ、生きられる丈けは生きて居るつもりだ。體は娑婆に居た時よりも丈夫だから安心してくれ給へ。考へて見れば、これも一種の逃避だねえ、結果に於いて——呵々。

未決中に受けた御親切、あつく御禮を言ふ——さらばだ。
健康なれ！ 奮闘あれ！

◇
【中村しげ子宛・九月十七日】
しげちゃん。

待つてゐた君からの手紙が夕べ着いて、嬉しく、繰り返し繰り返し讀んだ、今日は、いよいよ

よお別れの手紙を書き送る。

さて……と改まつては見るが、一向、改まり榮えのする言葉も浮んで來ない。今までに書き送つた手紙を書く時とおんなじ氣持と消えた。風につれて桐の一片がばさりつと落ちる——。

——秋の風が、面らを撫でて行く……はて？ ……いつもとは少々異つた感じもある。センチメンタルの奴が大分這ひ込んでゐるわい。

萬年筆、その他の一切のものを今日宅下げする。萬年筆はかなり使ひ古るしてゐるから、書き難くなつてゐるよ。そのつもりで……。

體は安心してくれ給へ。何アに、元氣で生きてゐるよ。命懸けで打つ放すピストルの弾が空つぽだといふことを知らなかつた程の呆け者だ。こんな抜け作は、案外長生きするものさ。

曇つてゐたのが、とう／＼雨になつてしまつた。軒下で鳩が鳴く。

温い、自由な家庭の味を知らなかつたり、幼なくしてそれを奪はれた者は可哀さうだ。僕は今度マユに會つて、あの淋しさうな姿を見て、益々此の感を深くした。

僕は幼ない時に両親は非常に愛してくれたに拘らず、家庭の眞の温か味といふものを知るには、家が餘りに貧乏であつた。經濟事情が、知らず／＼家庭の潤ひを無味にした。従つて僕は、それを知らなかつた。その後、に接した家庭がどれもこれもこれも嫌やなものだつたので、美しい温い家庭なんて、現代ではユートピアに過ぎないとさへ思ひ込んでゐた。それが後ちに、君の家庭

に接するやうになつてから、僕には初めてそれを味得出来たのだつた。僕がそれをどれほど嬉しく有難く思つてゐるかは、恐らくは君には分るまいと思ふ。今、僕が斯んな事を言ふのは、自分の事を考へるにつけても、神経を働かせる様なマユの様子がいた／＼しく思へてならないからだ。その内には、必ず東京へ來ることになると信ずる。勞運社には女手が無い。どうかよろしく願ひする。望月君にも、福子さんにも。

いろんな事でちよい／＼呼び出されるので、落ちついて思ふ様に書けない。日が暮れて來た。これで止す。

では、僕は行く。たぶん二三日中には何處かへ送られるだらう。

雨が、嫌やに降りやがるな——。

さよなら!! 皆さんによろしく。

◇ 【近藤憲二宛・九月十八日】

新谷、倉知の二君は檢事控訴の由。

それから、僕の行き先きへ最初に來てくれる時、望月君も、一緒に引つ張つて來てくれ。例の引受人を、若し出來れば、やつぱり二人にして置きたい。僕も行つてから頼むし、外からも二人で來て交渉して見てくれ。どうしても一人ぢやないといけないと言ふなら、君だけにして

置いてくれ。そして、手紙をくれる時、望月家からの消息文を同封する様にしてくれ。うまく二人になれば、僕からの手紙は交代に兩方へ出す。勿論、望月への手紙も、なるべく『勞運向き』に書くつもりだ。呵々。

今日もまた雨だね。古田君とはまだ會はない。

新聞に、僕が北海道行きを志願してゐると書いたさうだが、とんでもない嘘つばちだ。誰れが北海道なんか望むものぢやない。馬鹿々々しい。

◇ 【望月桂宛・九月十九日】

特別許可を願つて、正札附、最後の手紙を書く。

昨日は古田君と面會した。別に話すべき事のあらう筈がない。馬鹿話をして愉快? に握手して別れた。

今日、これから愈々執行になる。行先きは未だ告げられない。今朝、近藤君と岩佐君とが面會に來てくれた。十一時すぎだと、もう駄目だつたかも知れない。全くいい時だつた。

いい天氣だねえ、今日は。秋の彼岸だからな——。晴れ渡つて一點の雲もないのは、少し色彩が強すぎる。その澄み渡つた空に、さはやかな白雲が流れてゐる方が、感じがいいと思ふ。花檜の枝で、雀が糞をたれた——秋日和。

體量は十二貫八百あつた。ここへ來た時には十二貫七百五十だつたのだから五十匁増した譯
けだ。胸隔は七三あつた。これも少々肥つたのぢやないかと思ふ。のんきものは、こんなもの
だ。驚いたか。呵々。

あくびの泪

大正十三年十二月

俺の監房の窓からは、高塀とひさしの間、

わづか一尺ほどの空が覗かれるばかりだ

しみじみと嬉しかりけり星一つかかるすき
間の逢ふ瀬と思へば

キラキラと笑ひてやまぬ星一つ見飽かざり
けり魔子や如何にと

大寒と我れの寢息と戦ひし明けの硝子の曇
り嬉しも

たわむれに吐きし息吹き硝子戸に凝るは
涙か凝るは涙か

運動場へ出つつ

今日はまた編笠越しに見ゆるかな青空遠く
晝の夢月

序　　歌

あくびより湧きいでにたる一滴の
涙よ頬に春を輝け

運動場の塀にもたれて
陽を浴びつしじまに夢むこのこゝろたまさ
か見ゆる晝のあの月

ともすれば淡き夢追ふこのこゝろ嘲ければ
とて憎くもあらざり

星見えずただ味氣なき夜なりけり寒く石罅
をそと嗅いで見る

東京よ夜明け夜明けの音楽をちと聞くごと
に力覺ゆる

もの音の世界——二首

忍びやかに踏む靴音のそれぞれに人の心の
相を想ひつ

盲ひたる人の如くにももの音の世界は我に深
まさり行く

慄ふいのち

明けなんと薄水色に流れ来て寒むざむ壁に
漂ふ生命よ

鶏に白み雀ほのぼの雲裂けて鴉鳴きたる今
日を喜ぶ

囚車の金網より

濠端の眞冬の風に吹かれつつ少年の頬の燃
ゆるは嬉し

騎馬巡查あまた行き交ふその中をわが囚人
の自動車も過ぐ(赤坂離宮前)

彼女の歌——七首

浅草の頃

得飲まざる我れを嘲けり「飴ちよこを甜めて
居なよ」と酒をあほりぬ

「あたいだつて本を讀むよ」と投げ出しぬ霞
お千代が出刃をかざす繪
ぬばたまにほのと浮べる辻占の紅提灯を見
つめて答へず

病院に行きは行きしが苦が藥皆な捨てたり
と言ひて噤みぬ

妻 沼の里

悪毒にくずおほれたる體よりなほ巻き舌を
強く放ちき

村芝居掛ると言ひし若者に爛れし顔をどろ
だ行かうか

意地に生き意地に死したる彼の女の強きこ
ころを我悲しまじ

大正十四年一月

その夜の歌

一九二五年一月二十三日午後三時、突如、部

長來りて村木君病ひ危急と告ぐ。直に、靴音
に守られつつ病監へと急ぐ。我が監房より遙
か隔たれり。

友の病ひ篤しと聞きつつ急くなるこの足下の
土の冬風

衰へを偽りかくす勢ぞと眺めしことのおは
れ違はず

噫!! 友の面貌……。枕頭には獄醫、部長、
看守、雑役夫、布施氏、山崎氏、沼判事など
雜然たり。

その瞳はや甲斐もなし我が血潮通へと握る
手もつれなかり

激しき痙攣來る——。今日、午後より數回

起ると雑役君の教ゆ。
喰ひしぼる齒の間より流れ出づ苦るしみの
痰血のまじる痰

ぼろぼろと涙落ちけりわがなみだまだ枯れ
ずして残り居にけり

古田君馳けつく。布施氏と沼判事との交渉な
りて責附出獄と決る。

世を隔つ煉瓦の底の鐵窓に病みて消えゆく
友を見つむる

赤錆びに似たる光りの慄ふなるすすけし電
球に我れ眼牙ゆ

お伯母さん来る。續いて奥山先生、山崎氏と
共に馳けつけらる。……この上は、ただ自動
車の用意を待つのみ——。

心やや落ちつきにけり病監のかかる障子も
和みおぼゆる

病む友はひそと眠むれり雑役の尿の響きも
安けしと聞く

やや經ちて、自動車の準備に出で行きしお伯
母さん歸り來り「運轉手は病人を乗するを拒
みてきき入れくれず、今また、白山より寢臺
自動車を呼ぶことにせり」と悄然たり。古田
君と眼を見交はして恨みをのむ。

白山の方ぞと見つむ眼の前の冬ざれの庭曠
野とおもほゆ

再び瘰癧襲ひ來る——。意識は既になく、手
足も次第に冷え行く、ああ………。

苦るしみの餘音か知らず天井の暗きにふる
ふ蜘蛛の破れあみ

寢臺車來る。午後六時也。擔架を守りて表門

永遠へのこれが別れと冬の夜の獄庭の闇に
眼燃え居り

監房へ歸り行く……。遙かの庭の暗中に古田

君の聲あり、「大切にしまへ……」

監房に歸りてぐいと呑みほせし一と杓の水
寒冷の水

二

月

たらたらと雪しづくする遠近の軒の音楽眞
晝なるらし

電燈のまたたけるさへ面白し吹け吹け風よ
狂へ生命よ

窓によりてしばし雀の囀りを口眞似るれば
こころ満ちにき

あたたかく布團干しにけり枯芝のこの移り
香に早く寝まほし

自動車に揺られても酔ふ衰へは獨り冷めた
く笑むほかになし

梅匂ふ頃とは知れどこの庭の潦には月も宿
らず

あれすさぶ煉瓦の屑の庭の面に春を待つな
りくろがねの窓

壁に映る髯を可笑しみさまさまに見やれば
ふふと笑ふ影法師

恨知らば壁に宿れよわが影ときとにらまへ
てふき出しにけり

老媪のなさけにも似て灰色の空ひととこ
ろ銀くなごみぬ

寤めがてのうつつ心に眺めけり遠ざかる壁
せまりくる壁

三
月

霜解くる運動場のぬかるみに鳩の胸毛は踏
まれてあるかも

かく伸びし爪われにあり泥苔の庭の瘡蓋搔
きむしりたし

飛行機の祝砲の春の大空を嘲け眺めどとき
めくは胸

灰色の雲ほの紅く冴え出でて春の白塵舞ひ
昇しけり

空の狂ひ——二首
うららかな空たちまちに白玉の霰を亂しは
たた神鳴る

無爲を破る狂ひかしらず大空のかかるむら
氣は懐かしきかな

鼻毛ぬくこの快心よさ朝の窓をおほきく開
き東風にあまねし

濃き藍の空暖かく囚人等朱く浮べり大屋根
を葺く

春日さす囚屋をめぐる高垣の花崗石にもき
ららへるもの

ねばねばと朝ぐもりけり二本かたもとの樹の枝芽ぐ
む力こもりて

いや重き木の芽曇りに包まるる黙しの窓の
我が眼鏡かな

紅ひのいのちの血しほ滴りて落つあした淋
しく薄かすむかな

生きにうるむ大空なれや暖かく濃き藍なれ
や眼ぬるるも

うららかな空を仰ぎつほのしろき月をまさ
ぐる我れのこのごろ

母を憶ふ——三首

古土瓶洗ひて居ればたわいなくぼろと飲け
たり母を憶ひぬ

くるしみを齒にくひしばる癖のありし母の
その齒もいまは亡せけん

眞ごころに神も佛も拜み得ぬ母の産みたる
汝まごぞと泣かれし

病 臥——三首

一椀の冷めたき粥を手に載せて春のしじま
の底に坐りぬ

菊の芽のやわ葉を摘みてそと上に置かま欲
りする粥の色かも

梅干の核を噛み割りうす苦がき白ひ嬉し
病みてありけり

四月

春晝蕩々

欠伸より湧き出でにたる一滴の涙よ頬に春
を輝け(運動場にて)

庭草——三首

煉瓦屑うづめし庭も四五本の草萌え出でぬ
あわれこの草

おぢ慄ふ少年囚のあの眼あわれこの草など
忘れめや

かくてだも生き鬨へる春草の心が胸に響く
今日かな

獨房の安坐に馴れし膝骨の身動く毎に鳴る
が淋しも

ある日

たわいなき憶ひに遊ぶたわいなき我を見出
でて可愛ゆかりけり

神田伯龍を憶ふ——三首

伯龍の河内山などいま一度聞かまほしかり
春の沫雪

伯龍の小夜衣草紙聞きし夜を柳の雨に濡れ
たりしかな

道學者面らをなし得ぬ伯龍を嬉しと思ひ忘
れかねつも

寝ぬくもる胸のあたりを愛で撫づる春の夜
半を鶏が鳴くなり

運動場にて——三首
うす白き三味線草の花の上にそと眼を落す
看守なりけり

難房の人等罪なく語り合へりこぼれ生ゆな
る大根の花

こぼれ生えて咲く大根の仇し花囚人は見る
看守はも見る

春深し——二首

屋根裏に雀が崩す土の音かそかにひびく春
深みかも

春深かみ空のしじまを眺め居れば眞白き鳩
のむく毛落ちくも

春の朝の光り波だち雀等はむれ交み居れり
高き双樹に

日永

ほうほうとらうつけごこちに聲低く雀を追へ
る窓もありけり

運動場にて

東京小僧、吉原、死、など書き刻む煉瓦の
塀に櫻散るなる

友病むと音信ありけり一本の瘦せたんぼぼ
の庭に咲くとき

四月は盡きんとすらし一本の瘦せたんぼぼ
よ霞みても消え

冷やけき窓のくろがね頬に當てて若葉の雨
に腫すむなり

さまざまの文字のありたる太柱けづられに
けり若葉となりぬ

五月

八重櫻ほろほろと散る枝深くじつと動かず
孕み雀は

孤坐黙照

面白や雲と漂ひ水と流れ壁を動きつ我れ包
むもの

桐の花——二首

雀の音風に散りつつ桐の花さやかに咲きて
本を待ち居り

桐の花に朝の風吹き牛乳を飲むはよろしも
獄屋禮讚

夫君の病を護らへる望月福子さんに

手洗ひの水にうつろひ浄よ澄める青葉の影
を祈る君かも

六月

濁れる夜——三首

監房に泣く男あり淋しさの心いらだち憎く
てならず

すり潰す南京蟲の悪る臭き匂ひを我れを嘲
けても見

年々の南京蟲の血の跡の黒き笑ひが我れ圍
む壁

雨に啼く鳩——二首

鳩啼いて怪しき沼の底深く我をいざなふ雨
暗みはも

ほうほうと鳩が啼くなりほうほうと老ひ朽
ち果てし父が呼ぶなり

降りしきる雨に音なく扉外の樹の一葉だに
動かぬものを

經を讀む監房もあり濡れ苔のほのと匂へる
庭の旭ざしに

寂しさを雨の樹がくれふと啼きし鳥とは思
へど蝸に似て

樹がくれに一聲啼きし寂し鳥戀ひつつ待て
ど五月雨るるのみ

今日はまた梅雨ぐもりつつ鈍き日の漏るる
を眺め懶くてあり

空ろなる頭叩きつ放心の口を開けば涎れ流
るる

夕餉後の茶碗洗ひつ眺めやる梅雨の晴間の
雲の峰かな

夜具伸べて窓を見やればほの青く暮れ行く
空に白き雲あり

ただひとり青海原に浮び寝て仰がま欲しき
雲の峰かも

淡碧の夏の夕闇しづけしと榎の蝶の白く舞
へるか

雀の歌——四首

大いなるパン屑一つ毬のごと跳ねて遊べり
雀五六羽

幼きを飛び習はする雀等に戯むるさまの白
き蝶かな

びつたりと扉にとまりし嬉しさを首うごめ
かす雀もありけり

馴れて来る雀なりしを帯劍の男はむづと引
つ捕へけり

悲痛漢健在なれ!

哭すかと思へば唄ひし爛腸の彼れが行衛を
知るや灯の蟲

公判廷にて——三首

うち集ふ友と相見て笑み交はす法廷ゆえに
樂しかりけり

裁き給ふ尊き顔の鼻先きへひよいと飛び乗
る蠅欲しぞ思ふ

言ふべきは既に言ひたりいまはただ親しく
笑みて別れなん友

歸 獄——二首

夕闇の窓を仰げば病む友の青き手見えぬ歸
へり居るらし

去年の冬刑死なしたる友の居しその窓にい
ま病める君はも

死刑を求められて——二首

お茶番に終りしことも死の刑を受けていさ
さか意義を深めん

じりじりとなしつくづしつ殺さるる無期の
苦痛をのがるるは嬉し

落陽は殺人囚の室の戸を赤々染めて笠しづ
かなり

鐵窓に攀ぢぬ叫びぬ大いなる落暈狂ひつ沈
まむとする

七月

ゆるゆると流るるいのち雀等と共に起き出
で共にねまりつ

運動場にて——二首

いぢらしく小さき草の白き花觸るれば夏の
露こぼれたり

ただ獨り何をか夢む夢ならぬ男歩めりぐる
ぐるぐるぐる

蠅の眼も牡丹の色の珠のごと輝くものをさ
せよ日の影

炎天を一群の鳩光り飛ぶ窓に向ひて體操を
する

炎天地獄(運動場にて)——二首

鳩の糞べたりと浴びて黄金の息の苦るしき
かたばみの花

かさかさとわぐら葉一つ山蟻のゆき交ふ塀
に觸れて落ちたり

滴々と胸の血汐に雫くなる未見の友の音信
もあり

深山路をさすらふ友よ我が窓はいまとほど
ほに夕蟬のなく

とぶ蠅の聲黙然と聴き居しがいつしか微々
と我れ笑めりけり

此のころ如何に告ぐべき朝やけの空見惚
れつつ茶碗を洗ふ

寂 寥——三首
夕日景にぶく名残りし監房の隅ひとところ
見るとなけねど

韻々と雲夕焼けつ移り行く眺めこのまま夢
に入りたし

夢を喰ふ貌は知らずも我はいま寂寥を食む
獸なるらし

窓 簾——三首
幽栖に夏籠る人のあるものを簾かけたるく
ろがねの窓

簾もる日の景の綾さざめきつ碧巖集を過ぎ
らむとする

古簾卷かむとすれば陽の匂ひこもるか蜂の
去りもあへなく

病めるしげ子君に——三首
君はまだ癒えずもあるか枕上なく夕蟬は寂
しきものを

駒込ゆ千駄木わたりよるふかみ蝶蛄なくら
むかやすいすらむか

明け易き風吹きわたる庭草の露ちりぢりに
熱の消めやも

檜——三首
くろがねの窓に並みたつ瘦せ檜伸ぶる夏芽
か青き吐息か

ある枝は夏芽を伸べつある枝はすがれつ生
へりあはれ檜も

山の奥のおくべともずり火吹くてふ姿を思
へよ瘦せ檜汝

夜の暑さ——四首
寝苦しうそと起き出でて水惜しみ汗拭ふ間
も蚊のよせてけり

かかる夜は窓の闇さへ重油を湛えし如くぢ
つと動かず

眞白かりし敷寝の布も四五日の夜を経て蟲
の血に汚れぬる

寝苦しうまた起き出て飲む水の温めるさへ
や臭ふ柄杓に

いねたらぬ眼痛しも窓の樹の旭きららに蜂
あそび居り

衣ほす女監の庭ゆ日盛りて朱あせごろも照
らひ乾にけり

八

月

運動場へ出でつつ

幾たびか洗ひて褪せし白夜着に枯々て落つ
桐の花はも

待宵草のほかなる花を押せる文、しげ子君

より届く。薄き黄もて描きたらむ蝶にも似て

押花、いと興深し。

押花の待宵草は露匂ふ夢の胡蝶のそれにか
も似て

涼雨いたる

雨ながら鳴く蟬涼し眞白なる敷布をのべて
樂々と寝る

南 京 蟲——三首

しき布も柱も本もいや臭み南京蟲の血なら
ぬはなし

血に酔ひて足もそぞろに歸り行く南京蟲の
憎く可笑しも

夏の夜は早や明くらむか血を喰ふ南京蟲の
影し消ぬれば

夢醒めて魔子を想ふ——四首

筑紫瀉汐吹く風にくろぐろと染みて唱へる
魔子を夢みき

海を好み唱ふを好む快活の魔子が友なれ筑
紫海鳥

幼けなき妹の二人と父母の墓石立つ濱に今
日も唱ふか

逗子の海鎌倉の海手をつれし父母はいまさ
ねその西の海

雷 雨——二首

稻妻の明りに見ればいかづちの鳴り響くと
き躍る白雲

はたた神鳴るを嬉しみ高山の草木繪葉書立
て並べけり

朝の月——五首

いやひさに月は見じかも雲の穂の薄きに透
きてここに朝月

黒き蝶の夕べあやしく飛びにきと想ひつ朝
の月遙かなり

虹のごと橋を渡せる薄雲のいみじきろかも
朝すめる月

朝すめる月隠くしてはとぶ雲の風のゆらぎ
にゆるる蟬の音

朝月の窓の檜の木に呼びかわす名しらぬ鳥
よ戀深みかも

燃ゆる日車——二首

日ぐるまの花燃ゆるなり分房に狂へる人の
窓の暗きを

病む人は背負はれ行きぬ日車の花の光りに
眼をつぶりつつ

朝霞の檜の木が空にあきつ泛く羽ぬれの色
の侘びしきろかも

朝の夜明けごこちは體え臭ふ汗もそのまま
乾き行く肌

朝早く運動場に出づるは嬉し——二首

泥を吐く我は鮎かも青葉散る且の天に深く
息吹けり

朝風の運動場に青々し落葉をひろひ頼ずり
にけり

旅路の友より繪葉書を送り来る、うら寂しき

諏訪湖の夕照なり

諏訪の湖のきらら夕波綾なせるあやの思ひ
に耽けれと言ふか

蝸鳴き出づ

夕波の諏訪の湖邊にものを思ひこの蝸は汝
もきくらめ

幽愁の悲しくもまた楽しきを知る身となり
ぬおかし獨り居

夕べのみ窓より漏るる日の影の色にも秋は
しぬびくるらし

藍深き空に三日月現はる
船と浮ぶ黄金の月に搔き鳴らす天つ調べか
鯛の聲

今朝や秋檜が下の水溜りは窓のくろがね影
澄めりけり

桃色の薄雲の幕かかげつつほほ笑み出づる
白銀の星

秋 簾——二首
まどすだれ秋となりけり啞蟬のひそかにと
まりいつしかも去る

秋簾しづかに垂れて押花の干からび草をな
つかしみ居り

窓の檜の花つけしは女檜なればと聞きて
紡績の女工のごとく蜘蛛の巣の白きを被ぐ
花檜はも

むくつけき花にしあれど女檜と聞かばやさ
しもあが妻にせん

吾が妻の花の檜はおどろおどろ窓をへだて
てうらやつれ居り

九 月

白机南京蟲の血の跡の消ぬわびしさを秋の
雨ふる

鐵
窓
三
味

書き置く事(序)

私事、昨年九月このかたより當監獄の方へ居候替えいたす事と相成り、その後引續いて、むだ飯を食ひ、妄想に耽り、雜書を読み、或は駄句をひねり、歌をのたくるなど、しきりに無爲と繁忙を極め居り候。しかも、小人共は閑居して不ゼンを爲すと雖も、悪人なる私事は閑居して忽ち『禪』をなし、起きては孤座面壁、以つて蛙の如く腹をふくらせて胃病を防ぎ、臥しては碧巖録を拈じて眼を疲らすの魔酔藥となし、一意専心、のらくらと模範囚人たらん事に寧日ある次第に御座候。

さて、此處に一筆申残さんと存ずるは余の儀にも候はず、即ち其砌り、欠伸の折にふれ、思はずも苦吟なして吐き捨て申候ところの俳句奴の儀に御座候。

私事、そのおり／＼に吐き捨て候句屑のいろ／＼は、みな／＼娑婆の亡者どもへつかはすヨタ手紙の度びごとに、その埋草としてそれ／＼相當の成佛をいたさせ居り候ひしが、流石に煩惱の犬は追へども去らず、手許へそれ等の影をだに書きとどめ置かざりし事の、今に至つて何んとなく淋しく、且つその佛をそぞろになつかしくさへ覺え來り候。依つてもつて、南無三、我れこそは天晴れ凡夫なりけりと頓悟仕り、びた／＼、額を叩いて四邊りを掻き探し居るうち

あゝら不思議や、時に一束の反古の中より忽ち聲あり、『やあ、やあ、愚かや久太、我れ俳歌尊者之れにあり』といふを打ち見やれば、嬉しや二月このかたの句の姿のみは、ありありとインキに残り居り候ひき。故に、雀躍は窓外の正物に頼み置きて我れは直ちにそれを書き寫し、更らに今後なほ吐き捨て行く筈の俳句奴をも、やはり一々その姿を書きとどめ置かんづものと、そこで監獄覺えの觀世繕りをもてちよいと綴ぢ、題して『鐵窓三昧』と名づくるもの、即ち此の是れに御座候。

されば私事、此處に以上の如き、餘りにも平凡にして、おつたまげたる程に哀れ馬鹿々々しき因果因縁のヨタ文をものし、近き内に此の『鐵窓三昧』を引き取り給はる誰人かの爲めに一筆書き残して、以つて、たいくつなる今日の一日か半日かをたわいなく消光し去らんの念願、あらあら如斯に御座候。

大正十四年四月二日

市ヶ谷鐵窓窟

久太閑人

大正十三年九月

監獄の鳩もへつたぞ秋の雲
 秋の蠅がまじまじ俺の顔を見る
 小便で顔うつしけり今朝の秋
 秋雨に濡らして見たき髯生えぬ
 秋の蝶に乾く病舎の布團哉
 長き夜や鼠が鳴けば鳩も鳴く
 下駄の音は新入りか知らず蟲の聲
 半紙など買ひたり菊の匂ふ今日
 世の態は如何に窓外菊枯れぬ

十一月

煙突の中ほど見へて秋の晴
 月も照らせこれも浮世の一世帯
 雜念に見る雲早し秋の風
 お隣りは轉房されて夜寒哉

浴^あみ後のつかれ嬉しき小春哉
 座禪未だ芒が鼻を撫づ思ひ
 時雨來や麥飯の湯氣温かく
 囁み蓄めし小石を捨てん冬の風
 飛行機か湯の沸く音か冬の風

掃きよせし埃り彩ある小春かな
 鳩寒し嗽ぎし後の髯の露
 母を夢む

何憶ふ小春の椽の媼かな

いつ頃なりしか、君の家の屋根に、夜な夜な

石の落ちし事ありしを思出でて（望月君へ）

月冴えて石降ることもあるか

十二月

霜且、雀が一羽落命て居る
 誰が家の落葉か窓に飛んで来る

壁の血は南京虫か薄日影
 壁見ても寒し血の沸く爪の跡
 木枯の中に児供の聲が飛ぶ
 雪だ雪だ雪だ茶碗の色も澄め
 雪牙えや鴉が啼けば吠ゆる犬

大正十四年一月

初日影一尺ばかり漏れにけり
 塀外の焚火の煙り懐つかしき
 塀外や見えねど見ゆる焚火顔
 憶ふかな焚火に映へし悲痛面

樹は冬を眠むれど風の骸骨
 迷ひ來し毬よ獄屋の庭の霜
 飢え狂ふ態に吹雪の鴉かな
 髯剃るや雪照り返す壁の前
 あの霜が刺さつてゐるか痔の病

二月

涕や見交はす樹には霜しづく
 牢格子は月鐵窓は雪にこそ
 多空や獄屋の笛のかすれがち

裁判所獨房にて——三句

冬日さす古き埃の匂ひかな
隣りでも手錠を鳴らす冬の壁
冬夕べ看守は干魚焼いてゐる

今日は紀元節とて好き日なりけり、食事の湯
に番茶の匂ふ好き日なりけり——二句

茶の湯氣に春の近づく日の出かな
澤庵もやや黄色なり春近み
冬雲や額の皺の癖づきて

彼の男、終に我を折りて赤衣となり、小田原
の獄に行きぬ

小田原はさぞ千鳥の夜海の音
ほし足れる布團に寝ねて眼糞かな

朝やけや風邪の泪に眼は濡れて

三 月

切る爪の芽生えの菊にこぼれけり
戀猫や枕を汚す毛の脂
きらりぼたり雫す春のおもみかな
長閑さが淋しすぎると鳴く鶏か
鶏の聲霞んで眼には癖の苔

病臥吟——二句

春の星うららに熱のよせくるや

堺氏より送られし本を開けば、秘めこめあり

し香水の一時に邊りに漂ひて、病床の嬉しさ
言はん方なし
思ひきや香水に酔ひ春の星

四月

病餘、春日和を見かけて運動場に出る——二句
粥腹のひとしほうららふらかな
陽炎や欠伸の泪落てなほ

雑役君は長閑な男なり

間食が嬉しさうなり
轉り
轉や雀百態百々の聲

隣房の男、長の未決に倦み果てしとて、執行
者の送られ行く度びに太き吐息をもらしぬ

二三房送られたあとの霞かな
庭水の暮色や歸雁鳴かねども

馴れるといふことは、吾々にとつて必要なこ
とでもあり、恐ろしい事でもある

外役の鎖の音も長閑にて

木鉢に土を盛りて一本の百合の芽を植えたる
が鐵窓の前に置かれたり——三句

昂然として百合の芽青きこと二寸
母の乳のやうに陽を吸ふ芽百合かな
一本の百合の芽に春を讚えけり

蝶々よどの窓見てもこんな顔
 菊の根を分つ看守に守られけり
 菊の根を分つよ我は屁と欠伸

布團を干しに庭芝に出て——三句

堇、堇、枯芝にてはなかりけり
 夢包む布團ぞ堇匂へかし
 ひそみ笑ふ堇の何を想へとや
 塀を越えて手毬も來れば蝶もくる
 蝶とぶや誰が雀に投げた飯
 勞役の眼にけだるさの蝶々かな
 夢見鳴く鳩かあらか夜は隴
 前庭空漠

五

月

淋しさが凝つて蒲公英の花一つ
 醉生夢死
 贈られし肌衣の香ふ春晝夢

鳴くは虻か孕み雀の羽根重み
 春行くと孕み雀の吐息かな

望月君より生ま胡瓜とトマトを差入れられ

初夏の香氣、またなきものに嬉しく食しぬ

淡々と坐す日は嬉し胡瓜の香
 金網の目をぬけて會ひに來た蠅ぞ

悼渡邊滿三君死
雲の峯に向ひ告別申すなり

公判に出て——三句

やあ君も髯落したか衣更
光る眼がぎつしりと五月曇りかな
久し振りに叫びましたよ若葉風
大蠅やほけたんぼぼの莖丹く
桐咲くや隣りも借りる糸と針
雹の降る驚きを桐の花澄めり
鼻かめば臭し榎に花咲いて
ぶつぶつと胃の鳴る午後や花榎

望月君の病を問ふ——二句

梅雨せまるこの空の下に臥てゐるか
うつらうつら根津の蚊を聞く夜はいかに

古田君を想ひつつ

桐の花の褪せ行く雨と眺めけり

窓にたたきの廊下あり。羽蟻群をなして

穴より出づ。忽ち雀飛び来る。惨又惨。

こぼれ散る羽根に羽蟻を悼みけり

折角髯を剃り落したれど

五月雨れて囚人髯がまた戀し
世の底の五月雨の底の黙座かな
蠅とぶや軒にうつらふ水の影
夢一縷なほ追ふや朝の暗き蚊に

六

月

伊串君病氣全快の報を受けて
 跳ね狂ふ蚤も嬉しき且かな
 ただ懶し
 灯に狂ふ羽根抜け出し殻の身か
 窓一つ五月雨空へ開きけり
 五月雨や垢重りする獄の本
 鳥か否か墨滴飛びし梅雨の天
 袋貼る隣りの音や蠅閑に
 いぶし銀を散らせし如く無数の

羽蟲の舞ひ出でければ

梅雨夕べ悲しみの色湧き出でぬ
 濡れ寒むき梅雨草運ぶ雀あり
 梅雨寒むく古足袋はいて味氣なし
 空高き青葉に暮るる蝶白し
 夏の蝶の白う消ゆとき俺も寝る
 給水に朝の蚊浮ぶ曇りかな

獄窓易破夢——二句

愕然と夢の醒むれば大蛾かな
 臭蟲の血の手虚空を掴みけん
 髯剃つて書に青蜘蛛の這ふもよし

望月君より贈らるる新調の單衣に着替えて

朝涼に座すれば藍の香りけり
出廷の腹叩く朝の雲涼し

歸獄の自動車にて

編笠へ舞ひ込む夏の埃かな

さらば九舎よ

桐榎しとどさみだる別れかな

新 房

蠅居ぬも何やら淋し青疊

此處は運動場の邊り綠樹多し——三句

青桐の影やすらかに揺れてゐる

衰弱を青桐の影の笑ふなる

梅雨の苔かすかに薫ず衰歩かな

發 熱——二句

五月闇見すゆる熱の慄えかな

灯取蟲熱の夢見る眼かな

熱の香にそろそろ蠅も來初めけり

のどの中へ薬塗るなり雲の峯

食べ餘すお粥にも蚊の御落命

死刑を求めらる

縊れ縊れ南京蟲の食ひかす

子規啼かず紫紺の夜明かな

夜勤子の明けの眼や夏の鬮

分房に狂人は唄ふ雲の峯

七

月

窓は蚊のしろじろ淋し雨の音
蠅よ跳れ日影疊に伸びて来る
かくて住めば夏の西日も嬉しかり

窓に古蚊帳の框をはめて——二句

夕鴉笑ふな蚊帳の主じなり
窓蚊帳が孕むぞ娑婆の迷ひ風
明易き窓挿つ鳩を興じけり
今朝涼しころと落ちたる臍の垢

微苦笑

鶴脛を白扇をもて叩きけり
怒號する狂人暑く又戀し

病舎を望みて

亡き友の佛を松の落葉かな
迷悟子の味噌汁に蛾の落ちてける
窓の下を飯運ぶなり草いきれ
曉の蟬の聲一筋に想ふこと
窓蚊帳のもの憂く濡れし且かな
群鴉過ぐ

残灯に鴉亂るる雨涼し
暑くなりぬ襟番號も古くなりぬ
可哀痴呆

八

月

とぶ蠅を扇で打ちし歡喜かな

窓蚊帳にぼつたのとまり露深し

露は樹のぼつたは草の匂ひかな

しばし俺と遊べよぼつた世の中は

日影の匂ひ

しんかんとしたりやな蚤のはねる音

未明大雷

獨り起きて雷雨の天を見入りけり

黒い蝶がふわふわと土用曇りかな

麥飯の蟲殖えにけり土用雲

獄の本を借りしに、表紙の文字も手垢にそみ

て消え、扉に鍛冶橋監獄の印ありしは、いと

珍らし

灯取蟲は語らぬ本の手垢の史

想ひ涼し小楊子噛めば杉の香の

おれ聲にまたも鳴き飛ぶ闇の蟬

望月福子さんより、小諸の父母の許に幼きを

連れてきしとて、萩、女郎花、などの草花五

六種、文も露けく封じ贈られければ

文とけば信濃の秋のこぼれけり

啼け歌へ蟬よ信濃は既に秋

この露の音信り來とてか朝の月
福子さんのことを

まこと君は信濃が原の秋女
心から信濃の露に濡らるるか
公ちゃんの遊び戯る姿を想ひつつ——二句

萩の花の露がこぼるる頬つぺかな
近よれば逃ぐる蜻蛉を叱りけり
飯入るる穴に即ち夕すすみ

この日頃、窓近き檜の枝に黄色の豆粒ほどの
もの數多く生ず、花ならむか。

檜の花に露もけだるき寢覺かな
さても、固く黙々たる花よ！

朝露の檜の木覺めたか眠てるるか
ほ、笑まんとすれど檜花のむくつけく
昨日よりの雨、夜に入つて更らに狂風を加ふ。

稻光頼り也。秋！最後の秋！！

永別の秋となり行く風雨かな
この窓をこの顔を照らせ稻光
彼の奇盜子、何處にか轉房せし

稻妻に照らされな壁を這ふ男
朝鮮大水害との手紙を見て——二句

入黙し瘦馬嘶く秋の天
鴉よりも人衰へて秋夕陽

雲愁々

満ち雲の穴二つ三つ秋の空

窓の下で、外役囚が蟬を手掴まへた

囚人に蟬捕はるるそれも秋

その囚人等の話し聲『おい蟬は油で揚げると

旨いさうだな』ハ、ハ、ハ、此の野郎、そのまま

でも食べたさうな面付きだぜ……』

徒言のふと悲うす秋の窓

九 月

運動場に出づ、朝風に梧桐の實頻りに飛落せり

燕行くや梧桐の實のはらはらと

運動場にて——二句

踏み鳴らす足下へ落つ一葉かな

一葉から眼を上げて豁つと歩みけり

秋風や浴槽に泛く鳩の羽根

秋雨や色には出でぬ檜の花の

さる人への音信の端に

朝の月に鳥渡るなり丈夫也

運動に出る

面白や蜻蛉日和を編笠で

さる未見の友より、何か身につけし品をとて

後ちの形見を望まる。人間、空弾のピストル

一つ位いは撃つて見るべきものにこそ。苦笑

苦笑。
秋風や古禪も贈られず

然し、とにかく、茶色の更紗にて張りし名刺
入を贈る事にする。我が好みし露店の、憂き
品物也。

蟲の夜の露店を戀ひし我身かな

さて、其ほか御形見となるべき品々は……

古下駄は地蟲が鳴いてくれるべし
蟲聴くや仁丹の舌水甘く

隣房の男曰く

酒の事は訊いてくれるな蟲今宵

判決日。無期ときまる。秋雨が降つてゐる。

秋雨を餞けらるる別れかな

歸りの自動車の窓から、これが見納めと東京
の街を眺めつつ

見納めの街は秋雨晝灯

さらば鳩よ朝寒顔をこちらむけ

あゝ古田君

冷やかな雨にいや澄む眼かも

窓外の景恨深し

刑場の樹立はあれか雨の虫

その日は壯快な秋晴れならむ事を……

その且鴉大晴れを祈りけり

我等五人は……

孤回蓬等

死に別れ生き別れつゝ飛ぶ雁か

此の章は筆墨未許の期間、即ち大正十四年九月二十日當秋田刑務所到着から大正十五年五月十五日に到る、約八ヶ月間に呟いた俳句と短歌とをのみ、記憶のまゝに記したものである。二三月の頃、僕の心の中にも大きな嵐が一二度吹きすぎた。従つて書き記すべき感想も多々ある譯けである。が、それ等は又、今後の感想文中に追憶の形で書くことにして、此處ではただ句と歌とにのみ止め置く。

◇

大正十四年九月廿日夜、秋田刑務所着。翌日運動場に北國の秋天を仰いで、

死ぬ迄の赤い衣か彼岸晴

十一月に入り、兼ねて聞き及ぶ氷雨（霽也）降り初む。十二月中旬より雪亦盛んとなる。一月頃には四五尺積るべしと聞き、晩年の一茶が故郷の信州柏原村なる物置小屋へ辿り着いた時の、

これがまあ終の住居か雪五尺

秋田刑務所

碧雲 暗雲

といふ句がふと泛んだ。

獨房はたゞ

雪氷雨吹き込む窓を頼み哉

眠れる蠅

壁の上にちつと動かぬ蠅一つ冬をや眠る息

やとだへし
壁の上にちつと動かぬ蠅のごと我れの命も
此處に終るか

大晦日

眠る蠅除けて煤掃く男かな

大正十五年一月元旦

元旦も曇り曇りと啼く鴉

元旦やたゞ牙ゆる雲啼く鴉

夕暮に淡い初日を拜みけり

水瀧や冷々として骨を滴る

一冬の水瀧泌みる囚衣哉

大寒に入り、湯婆を與へらる

湯婆を抱いて更に愚とならむ

一椀の鹽茶待たる、氷雨かな

冬の起床

雪凍る窓の硝子のきらきらと青く光りぬ

月残るらし

雪深き窓に佇み月光の青きを吸ひぬ魚の如

くに

二月に入る。

水暗く映る眼玉を寒むみけり

窓裏積雪

ふと開けさの雪がこぼれた桶の水

休日

日の影や心疲れに足袋干しつ

三月に入る。

深く眠り得たる眼覺の深い雪

幻影

老母を包む冬の光線の濁る塵

屋根の雪のとどろと落ちて揺る、陽や

古雪の雨夜の獨り按摩哉

浅春

梅匂ふ里ゆ戀しも蒼空の牙ゆると見れば霞

落ちくる

蒼空のいづくからともなくに落つ眞白霞は

いみじきろかも

四月に入る。急に冴え返つて寒風強く、霞、氷雨、雪、と、かなり荒れた。

爪色も先づ歡ばし春の空

空へひたと顔つけて春を讚へけり

魔子が赤坊の頭を憶ひつ、
春の空を見て泣き止んだ大きな眼
畑打つ囚人の空を仰ぐ顔
雪眼病む看守寂しく陽炎へり
永き日や幼時偲べの飴太鼓

五月。秋田の櫻も漸く咲き初めたとの話。あたりに樹木のない故か、我が庭には蝶も飛ばない。青草さへ稀れた。春は只、空にのみ輝いてゐる。

壁の空氣穴から、一匹の黄蜂が部屋へ飛び込んで來た。そして、肩や膝などを這ひ廻つたり、ちつと羽根を伏せて外の蒸氣の音を聞き入つたり、約一時間ほど、淋しい部屋へ春の彩を閃めかせてから歸つて行つた。

耳糞を取れよと肩の蜂が云ふ
我れ醉蜂と號すを知るやお客蜂
蜂は歸るか潤へるあの蒼空へ
蜂を送る窓の暮春の砂埃り

望月の公チヤンに贈るべき、童謡が一つ出来た。

影法師

壁に映つた影法師さん

いつでも私の眞似ばかり

お手々を振れば

お手々振る

オチニと歩けば

また歩く

おぢぎをすれば

おぢぎする

ほんとおかしな影法師よ

いつたいあなたは誰アれなの

今日は眼覚めるか、明日は飛び出すかと、暖かくなりかけた時分から毎日の様に壁を見上げて居たが、大切の蠅は一向飛び初めない。辛棒を切らせて、トウトウ箒で掃き落して見ると……

……何んだ馬鹿々々しい、古くからの死骸ぢやないか!! 即ち、窓から春風裡へ、ハイちやい。

南 無 や 蠅 春 風 葬 と な し に け り

無 臭 大 音

昨夜『乞食桃水』讀了。二三年前讀んだ時とは又別個の感があつた。

面山和尚は彼を頌つて「日本初看眞散聖。寒山拾得好雙肩」といひ、中村星湖は此の書の跋文「我觀桃水」中に「私はその類例を日本よりは西洋に、佛教徒よりは基督教徒の中に求めたくなる」といつて、トルストイやフランスの事に言及してゐる。僕はフランスの事は全然知らないが、しかし、桃水は寒山や拾得とはかなり異なるものがある様に思ふ。寒山などには、むしろ良寛の方がより近くはあるまいか。(尤も面山の時代にはまだ良寛はゐなかつたのだが……)

「乞食の安右衛門」が「乞食の桃水」に多くの興味を覚えるのは當然だらうが、僕はやはり星湖君と共に「桃水の志は乞食そのものにはなかつたらしく推量する。」そして僕はその「出家の出家」をしたといふ點と、「信施を受くるよりも労働」を選んだといふ點とに、桃水の人となりを見出す。「労働と宗教との不二」を主張する百姓の江渡狄嶺君も「桃水の出家の出家を思ふ

毎に、私はいつでも六祖慧能の十五年間の獵師生活を想ひ、又、最初の禪家の生活規則を定めた百丈の、一日不爲一日不食といふ言葉を心に浮べる……云々」といつてゐる。

しかし又、僕は別に斯う思ふ。桃水のある「労働」も、「乞食の群に投じた」ことも、すべて「忍苦」といふ事が主であつたのではあるまいか。星湖君のいふやうな意味の「不勞所得の罪悪感」は勿論あつたに違ひないが、しかし其の心よりも「忍苦の修業」といふ事が、桃水のあの労働生活と乞食生活とを生み出したのではあるまいか。即ち、樹下石上の出世間の苦行から、人間社會のドン底生活の苦行へ移つたといふことが、その根本であつたのではあるまいか。そして「不勞所得の罪悪感」は、その裏に潜在意識として働いてゐたと見る方が、あの時代の思想から考へて、より穩當ではあるまいか。

僕は昨年、市ヶ谷刑務所で相馬御風著『大愚良寛』を讀んだ時には、春風に觸るゝの思ひをしたが、この『乞食桃水』では、尊敬の念に伴つて、一種の重苦るしさを感ぜられた。これは桃水の、忍苦的色彩の強さから來る感じだと僕は思ふ。

著者安右衛門君は、「桃水に後ること百五十年、北越に同じ曹洞宗の奇僧大愚良寛があつた。彼が國上山の五合庵に悠々と詩歌に半生を托したのと、憐れな乞食の群や苦惱者のうちに半生を奉仕した桃水とは、その間雲泥の差がある……云々」と言つてゐる。が、しかし僕は、あの良寛が國上山近傍の町の商人、百姓、村童の中に交つて、その磊落飄逸な行ひや、春風蕩々た

る談笑裡に多くの人々を感化した事實を思ふ時、詩歌にのみ悠々と遊んでゐたとは言はれまいかと思ふ。桃水は、その「大慈悲心」に於て、「忍苦の修業」に於て、遙かに良寛に優れてゐたではあらうが、僕一個の感じの上から言ふならば、僕はどうも、桃水よりは良寛の方が親しみがあつて好きである。

(五・一六)

畑の遠近に多少の青草が伸び、白い三味線草の花が四つ五つ咲いてゐる。これが今年になつて初めて見る「花」だ。貧弱だが、デモ流石に花は花だ。何處からか蝶が一つ飛んで來て居る。地を低く、黄蜂、地蜂なども忙しく飛び初めた。

(五・一九)

楠正成が參禪したといふ話は、歴史家の多くは後世附會の説としてゐる様である。が、禪家の方では、一劍倚天寒の喝に因つてかなり有名である。

『楠公何某禪師に問ふて曰く、生死交叉時如何。師言下に喝して曰く、截斷兩頭、一劍倚天寒。楠公聞いて滿身流汗す。師、正成の體を見て曰く、汝大いに徹せり……』
といふやうに二三の書で讀んだ事を記憶してゐる。ところが、いま坪野平太郎著『叱牛録』を見ると、

『昔、楠公が湊川で戦死せられたその前夜に、俊明極といふ名僧の庵を叩いて、生死の境は

如何なるものであるかと聞いたたら、「何の事も無い、ヒヤーツとする位のものだ」と事もなげに答へたところが、楠公は満身に汗ビツシヨリかゝれたと云ふ。その體を見た禪師「汝大いに徹せり」と言はれた。楠公は深くその垂訓に感激し、其の翌日は思ふ存分に戦つて遂に弟正季と耦刺して死んだ」

と、ある。どちらの種本が正しいのか知らないが、讀んだ上での感じから云へば、どうも後者の方が面白い。「一劍倚天寒」の名句よりも「ヒヤーツとする位のものだ」との一言、遙かに身魂に徹するやうに思ふ。この事もなげなる一言こそ、まさしく楠公をして流汗沛然たらしめたらうと合點ける。

(五・二〇)

雑誌『人』来る。井泉水君の俳話「自然を聴く」が第一に眼にとまる。

僕がまだ俳句を唯一の樂しみとしてゐた頃、たま／＼來阪した井泉水君を迎へて、堂島のさる俱樂部で歓迎俳句會を開き、「障子の句に就いて」と題する眞摯な季題論を聞いたのは、今から數へて十三年も昔の事になつて了つた。井泉水君の俳話は、あの頃の自分の姿をも思ひ出されて何んとなく懐かしい。

井泉水君は丁度『層雲』を發刊し初めて、今日の句境の第一歩を踏み出さうとする時であつた。丸顔で、づぼら髯が少々伸び、鐵ぶちの眼鏡の中から澄み切つた眼の光つてゐた面影がい

まだに記憶にある。確か飛白の着物に飛白の羽織で、黒い兵兒帶を締めてゐた様に思ふ。

「愛妻を亡へる井泉水氏東本願寺に入る」といふ新聞記事を見たのは、一昨年、僕が福田大將を附け狙つてゐた頃だつた。そして昨年八月、市ヶ谷で初めて此の『人』を購讀したとき「井泉水氏西國巡禮に旅立つ」といふ記事を其處に見出した。更らに本年三月ここで濱田教誨師から『人』の綴ぢたのを借讀すると、本年一月號に「孤影新春」と題して、同君の旅行吟が載つてゐた。僕はその中の、

孤り旅の元日の浪の音雀の聲

といふ句を透して、大正の芭蕉然たる井泉水君の巡禮姿をしみじみと頭に描き、心に味つたのであつた。

孤り旅の元日の浪の音雀の聲

清くすき透つた感じのする、強い淋しみのある句だ。ア、僕が四國の南岸を死神と共に漂浪ひ歩いたのは……さうだ、確か廿一歳の夏だつたと思ふから、十三年ほど以前(すると、井泉水君と會つたのは十五六年も前になるかも知れぬ)になる。僕のある時の旅——旅と云ひ得るならば——は、まるで、足腰の立たない癩病患者が泥濘の中をのたくり廻つてゐたやうな旅であつた。……さうだ、炎天の泥礮の臭ひが鼻をつき、藻濁りの波の上を千鳥が飛んでゐた。海近い畑の中には、日車の花が爛れたやうに咲いてゐた……

(五・二二)

『叱牛録』に曰く、

「不動心を得るには、不用意の用意、工夫外の工夫がいる。糞度胸の如きは眞の不動心ではない。」

うむ……ギャフン!! 「我有大力量、風吹即倒」

『エライ變つた社會主義者やさうな——』

夕方、窓の外を歸つて行く一群の囚人の中から、斯うさゝやく聲が聞えた。

昨年十一月、或る風の吹く夕方にも、やはり同じ一群の人達が、

『社會主義者が來るとお菜がよくなるつて言ふけど、一向に駄目ぢやないか』

などと言ひながら窓の下を通つた。が、その時には、たゞ苦笑をさせられたに過ぎなかつた。しかし今日の『エライ變つた社會主義者やさうな——』といふ言葉を聞いた時には、冷めたい、

死人臭い、實に氣味の悪い手の平ですうーと顔を逆か撫でしられた如くに感じ、ブル／＼と體の慄えるのを覺えると同時に、水滸のやうな味氣ない泪がポト／＼と腹の底へ泌み込んだ。

影法師『ヘッヘッヘッ、それや一體何んの涙だい、大將。今夜はあんまり「無臭大音」でもなささうだぜ!! ヘッ、ヘッ、ヘッ、……』

(五・二九)

『總べてに負くるは總てに勝つ事なり』といふ、奇妙な、しかし確かに一つの眞理である事を最初に悟つた人間は、負け嫌ひな人間といふ動物中の、最も負け嫌ひな奴だつたに相違ない。

杜

鴉

永平寺管長北野玄峰老師の來所を仰ぎ、一席の特別教誨ありたり。八十五歳の老軀、流石に歩行の衰へは見受けしかど、壇に上られてよりの意氣、その音吐、實に獅々僧が面目躍如たるものありき。

禪の説法、初めて聽聞す。言句の呐々として迫り來る氣鋒、直指、佛地に躍入らしむるの慨、我が豫てよりの想像に違はず、嬉しくありたり。

大塗杖もて床を鳴らしつ壇に進む紫衣の老衲が霜威、黄衣を纏へる一侍僧が地藏然たる温顔、墨染を着せる二人の供奉僧の羅漢然たる面魂、いづれか古畫中の人物ならざる。

短夜や師の一咳に弟子醒む

六花の句も思ひ出でられ、いと興深く眺めき。

(六・一七)

房の際、砂利敷ける邊りの草は殆んどむしり去られたれど、いまだ何んの苗をも植えぬ畑には、時得顔の青草まばらに生えたり。

「すゞめのろうそく」の青く立ち並べる、「かや草」の穂の風になびける、「三味線草」の花の白く名残りを見せたる、これさへ今は捨て難く覺ゆ。されど、此處には近く茄子植ゆると聞えければ、草々の運命長くもあらざるべし。去年の秋、風に送られてたまたま獄屋が畑に落ちたる草種の、久しき冬を土に忍びつ、春の芽、梅雨の穂と、辛くも伸び得し今日の命なれど、明日にも忽ち抜き捨てらるれば、死して其のまゝ畑の肥しとなる。もの皆なの「いのち」の輪廻、哀れ尊く、情趣深し。

(六・二二)

布團は今日より夏らしくなり、蝸も、いささか汚れたれど白麻を下附さる。市ヶ谷刑務所の、窓わくに古蚊帳の切つ端しを張れるが如きものにはあらず、一人前の蝸なり。

蝸 吊れば 觸るゝ 編笠 水の 桶

蝸 好ききの 怪談 好ききの 男 哉

畑の胡瓜苗に注ぐ爲め、窓下の下水溜りを汲み初めしより、蚊は著しく殖えたり。先づは、めでたさは今年の蚊にも喰はれけり

と、一茶爺が句にても口ずさみ、苦笑せんか。

(六・二九)

僕は幼時から、家庭に於て、學校に於て、常に「二二が四」といふ生き方を教へられて來た。が、社會の荒浪の中へ孤舟を艚ぎ出すや否や、人間には「二二が八」といふ面白い生き方のある事を知つた。

ところが、最近禪の本をボツ／＼讀む様になつてから、人間には、「二二が零」といふ奇抜な生き方もある事を知るに至つた。

二二がゼロ！

(七・四)

監房の附根の所に生えてゐた、かたばみ草の花は、先月廿日頃、きれいにむしり取られて了つたのだが、此頃また新らしい葉を伸ばして、黄色い花が其處此處の砂利の中から炎天を覗いてゐる。早いものだ。

生の力!!

砂利の中に咲くかたばみの花 親し

寐語閑語

休み日。

今日、團扇を下附された。どうも馬鹿に暑いと思つたら、日午は九十度近くある由。夏中の最高は九十六七度まで昇るといふから、どうかすると東京より暑いかも知れない。それに四方が厚壁なんだから。「ひやく」と壁をふまへて晝寝かな」といふ調子には勿論ゆかないしさ。

——え？「横着を言ふな」てかい。はつ、はつ、はつ。

(七・一八)

寐語閑語綴るや蠅に笑はれつ
空を飛ぶ夢さめてけり手に團扇

病臥

蠅の聲呆け眼に聴き入りぬ
痴縁かや毛垢を落とせば甜むる蠅

◇

蝶の卵子化して青蟲となり、畑の玉菜ほとんど蠶食され了る。花芯を媒ちて子孫を遺さしむるの蝶は、即ち又、緑葉を食み盡すの蟲。もの皆なの両面、陰影、あくまで皮肉也。あくまで深刻也。

惨たる玉菜より眼を轉じ、遠く雲の峰を眺めて下腹に氣を籠むれば、蟬の叫び、遙かの方より心耳へ流れ来る。

蟲閑かに菜を食み盡し雲の峰
蜂暑し雀は落す屋根の土

(七・二五)

◇

梅雨中は殆んど照り續けた加減か、土用も半ばにならうとする今日此頃になつて、梅雨染みた雨がよく降る。今年の冬の小作争議は、更に深刻な場面を見せるだらうと想像される。

雨の晴間を運動に出ると、遠くの胡瓜畑には白い蝶が群れ飛び、古井戸の井桁に鹽辛蜻蛉がとまつてゐた。夕べ雨に交つて、久し振りに蛙らしい聲を聞いたと思つたら、堀ぎわの、苔づいた小石の上に、一疋の小さな青蛙がちよこなんとして坐つてゐた。

仙人然とした藁や、池にぼつかりと泛んで青空をにらんでゐる殿様蛙なども面白いが、この雨を呼ぶ青蛙といふ奴も中々捨て難い趣きがある。一茶の、

露の葉に飛んでびつくり蛙哉

薄べりに尿して逃げらる蛙哉

なども、此の青蛙趣味である。

あの、古井戸や、池や、小流などに、誰れやらの句にあつた、

泛ぶ様は他力本願の蛙哉

と云つた恰好で、ぼかんと泛いてゐる殿様蛙に煙管のヤニを食べさせると、直ぐ、はらわたを吐き出して、水で綺麗に洗濯してふと聴いてゐる。

人間のはらわたも、この蛙のやうに自由に吐き出して洗濯の出来るやうだと、嫌やな胃腸病などの心配のないのは勿論のこと、謂ゆる「腹の中のきれいな」人間ばかりで、さぞ、すがすがしい淡白な社會が出現してゐることであらうにと、少々羨やましい。(八・三)

朝 顔

七月の課程が不終了だつたので、必定この十五日には筆墨を引揚げらるゝこと、思ひ、十日すぎから總べてその準備をして筆紙に觸るゝことを止めてゐたが、十五日になつても一向に引揚げがない。係部長に訊ねると、教務から引揚げに来るだらうとの話である。丁度十六日に教

務主任が見えたから其の旨を話すと、「不終了！それはいけないナ、わしの方で調べて置く」と云はれたが、今日に至るも未だ何等の沙汰がない。忙しいので手が廻らぬのかも知れぬと思ひ、また或は溫情的にトボケて放つて置いてくれるのかな、とも考へて見る。どちらか知らないが、兎に角いまだに引き揚げはない。この二三日、机上の筆墨を眺めながら小首を捻つてゐたが、とう／＼今日からまた書き始めることにした。(八・一八)

今朝、蚊帳をた、まむとして、青蛙に觸れて驚く。

新涼が飛込むで來た且哉 (八・一八)

久し振りの快晴である。澄み切つた朝空の遠くから、潺湲として秋が流れて來る。

今朝の秋

鳩は高く秋氣の流れのぼるらし

今朝の秋眞如薫ずる景色哉 (八・二〇)

そろ／＼七夕様かなと思つて聞いてみると、はや今日はお盆の十四日とのこと。チイ／＼蟬や露蟲の啼くのも無理はない。

雲の下を行く薄雲や秋の蟬

午後になると、西南に面した唯一の窓から太陽の光が部屋の中へ訪づれてくれる。最初、豆粒ほどの一点の輝きが床板の上に落ちる。と、それが見る／＼うちに横へ延び、丁度窓巾の長さの輝いた棒となる。更らに其の棒は、だん／＼と太つて行つて終に窓形の日影となり、其の影が次第に東側の入口の扉へと推し進んで行く。日影が入口の扉に達してしまふと、こんどは漸々に南側の壁へと移つて行き、再び西へ西へと南の壁面を傳つて、高く小さく消えて行つてしまふ。僕は、此の日影の歩み行く姿や、光線の色合の微妙な變化を楽しく眺め、或は氣候の變化と日影の歩道の推移する關係などを興味深く觀測しながら、其の日／＼を消じて居る。さる人の獄中作にも、

くろがねの窓にさし入る冬の日

移るを守り今日も暮しぬ

といふのがあつたと記憶するが、日々の時の歩みの一刻々々を、囚人ほど深く味ふものは他にあるまい。囚人は、ある意味からは『生ける屍』と云つていい。が、斯うした生を味ふ深刻さから言へば、囚人は却つて『全的に生きる者』と言ひ得るだらう。

豆粒ほどの最初の日影が、丁度紙の上に落ちた油滴の如くに擴つて行くのをぢつと眺めて居

る時、光線に彩られた埃の中の極めて微細な一つ一つが、突然、つつつつと走り出すことがある。オヤツと思つて眼を近づけて熟視すると、皆なそれ／＼の立派な昆蟲である。幼蟲か成蟲かは知らないが、概して白色なのが多く、茶色や薄鼠色なども多い方である。そして、其の種類も亦、随分多様である。たゞ閑々寂々として居る我が獨房の裡も、仔細に觀察すると實は存外に賑やかなのだと知ると、うら淋しい心地の底から温い微笑の波がゆらいで来る。

(八・二二)

仇花の秋を暑うす胡瓜哉
白褌せし蚊帳より起ちぬ秋の風

奇々怪々なる高山旅行をなす。山湖の洞窟に泊して洪水に遇ひ、アツプ、アツプの最中に夢破れたる。……便所に起ち出でて窓下に佇めば、流月濛々として煙霧疾し。

月濛々水に溺るゝ夢醒めて

今日は九月一日である。……穏やかな夕雲である。

人の間は、秋の黄雲を指さゝむ

(九・一)

『人』八十二號來る。

記事によれば、本月の廿三日から三日の間、信州柏原で一茶の百年祭が盛大に舉行され、當日全國から出席する名士三百名、且つ長野市の公園に一茶の句碑が建ち、信州教育會では五ヶ年繼續の豫定で一茶叢書を刊行すると。

一茶爺が深く研究されるのは嬉しい。また句碑もよからう、叢書も結構だ。が、謂ゆる名士などと稱する手合に、變に持ち上げられたりするのは考へものだ。あの爺さんばかりは、俳聖一茶などと祭り上げたくないものだ。いつまでも、

團子召せ 蟲も屁をこく 爺が茶屋

的な、田舎者臭い、極く平凡な、そして童心に富み、人情味の豊かな、味ひ深い親爺として親しみたい。

◇
良い月だ。いまだ弦月ではあるが、仲秋の清空は一點の雲もなく、實に淨く冴え亘つてゐる。

一昨年の今月今夜も、かうしたい月が出てゐた。そして、三年前のこのやうな月明の夜、大杉夫妻は東京憲兵隊で虐殺された。可愛かつた宗坊は、こんな月を無心に眺めて居るところ

を締め殺された。その上、三つの屍は、赤裸にされて庭の古井戸の中へ投げ込まれた。……
こんな清浄な、平和な、美しい月光の下で!!

蟲啼くや此處な庭にも古井戸の (九・一六)

清 宵

◇
夕方から夜にかけて、珍らしくも神鳴さまが狂ひまわる。いゝ氣持だ。凄怨な稻光に打たれ、ピリピリッと筋肉に慄えるほど雷鳴を聴くと、頭の中が實にすがすがする。

夏、故郷の明石邊で聴く、クワラ、クワラッ!! パリ、パリ、パリ、とくる奴に比べたなら遙かに物足りない音ではあるが、それでも、秋田へ來てから雷らしい雷を聞いたのは、今夜が始めてだ。
(一〇・一)

◇
結構な秋晴れだ。白い蝶が、また玉菜を訪づれる。晩秋の赤蜻蛉がふえた。雜草に交つて、紅い蓼の花が七八本咲いた。敷き砂利の邊りには、今なほかたばみ草が黄金色の可愛らしい花をつけてゐる。

雲の影がさすと、玉菜の中で青蛙が鳴く。何處やらで、こほろぎも低く歌つてゐる。雀が五六羽、ばた／＼と風だて、飛びすぎた。白い羽毛が淋しく空に散る。

(100・100)

◇

いろんな思ひ出の中で、最も懐かしく楽しみ深いのは、幼なかつた頃の無邪氣な遊びである。今日は一日中、仕事の手を働かせながら小供の時分のことなど夢の様に思ひ浮べて懐かしんだ。

故郷の明石に、お城をとりまく古びた外濠がある。蓮の花が散り、葉も枯れはて、眞黒になつた寶がポトン！ポトン！と寂しく水の中へ飛び込む頃になると、それまで蓮の葉に隠れてゐた水面がすっかり現はれて、蘆むらに巣くつてゐるかゝつむり(鳩)が水にもぐつたり、水面を這り走つたりするのが見え初める。と、子供達は岸の芝草に並んで、

かゝる、かゝる、つむり

かゝつむり

頭のでつべに火がついた。

と唱ひはやす。灰色の鳩の頭のところちよつぱり眞紅な毛がある。それを「火がついた」とはやすのである。はやし立てられると、鳩は、恰もその頭の火を消さうとでもするかのやう

に、水の中へずんぶり／＼と潜る。泛び出ると、また子供達が唱ひはやす……………。

こんな、幼ない思ひに耽つてゐた間に、次のやうな童謡が出来た。

かゝつむり

かゝる、かゝる、つむり

かゝつむり

頭のでつべに火がついた、

たいへん、たいへん、

水もぐれ。

出てこい、出てこい、

かゝつむり

消えたか消えぬか見てやらう、

ぼつかり、そこらへ

浮いて出る。

出てきた、出て来た
かみつむり

まだまだ消えぬぞ頭の火、

もひとつ、ずんぶり

水もぐれ。

(110・111)

しぐれ

◇

昨日今日、めつきり寒くなつて了つた。三日前には赤蜻蛉や蓼の花に晩秋を愛でたのに、今朝の時雨が、午後には早や北國名物の氷雨とかはつた。

鳶一羽啼れては鳴きつ時雨けり

しぐれにし土を佗び踏む草履哉

蓼の花いかなる戀にしぐれしぞ

(110・111)

今朝、珍らしく虹を見た。色は四つしかハッキリと見えなかつたが、随分彩濃くて綺麗だつ

た。約十五分間ほど現はれてゐた。大正十三年の五月に、相州小田原の北原白秋の家の二階から城ヶ島の方面の上空に見た虹も美しかつた。

朝虹を鴉が啼いて神の旅

◇

今日から、いよ／＼「機織」を始める事になつた。久留米がすりである。機の取りつけや何んかに二日かゝり、さて教はり始めたが、中々むづかしい。全然初めてのところへ、足が痛んでよく踏めないので滑稽なほど下手糞だ。まア其の内に馴れて来るだらう——。馴れば、趣味のある仕事だから靴下の先かがりなんかと違つて面白味も出てくるだらう。

◇

中村より手紙来る。文中に、

『公子は、日曜にはマコネエチャンと會つて仲よく遊んでみます……』

とある。おゝマコ！マコ！いよ／＼上京して来たな。嬉しい、嬉しい。これで氣に懸つてゐた事が一つ片附いた。誰れがマコを世話してやつてくれるのかは知らぬが、何分よろしく願ひ申す。

(111・112)

冬 日 影

◇

「自然に學ぶ」といふ人よりも、「自然と語る」といふ人の方が僕には親しみを感ずる。

「自然を拜む」といふ人よりも、「自然を愛する」といふ人の方が僕には嬉しく感ぜられる。

子供は自然と語ることを好むが、自然から理論を引出したり道義を學んだりすることは知らぬ。子供は自然を愛するが、自然を拜むといふやうな氣持は知らぬ。

人間苦に徹した成人の宗教的な敬虔な心持と、極く無邪氣な純真そのもの、やうな子供の心と、どちらがより尊く、より價値多いものなのか、僕には判断が及ばない。(一一・一六)

◇

『旅人芭蕉』を再讀。

『或日、芭蕉は窓に肱をかけて、物を思ふでもなく、輝かしい春のいきづきに耳を傾けてゐた。庭の池は荒るゝまゝになつてゐた。それは、魚の籟として用ひた頃は、手入れも届いてゐたであらうが、大火から後は全く棄て、顧みられず、藻が浮いたり、蛙が棲んだりするのに任せきつてあつた。彼は此の毎日見慣れてゐる溜池に、格別の風趣がある譯けではないが、あるが

儘に物寂びた感じには飽きぬものがあると思つた。凡て人が作つたものは如何に佳く出来てゐても、堅苦しい意力や智力が露出してゐるやうで面白くないものだが、其物が廢れて人手から離れて「時」といふものゝ手に渡されてしまふと、「時」はすつかりそれを美化してしまふ。……それは人の手に虐げられてゐた物質が、自然の儘に歸る所から來るのかも知れぬ。人間の短い生命を越えて流れてゐる、悠久な時間といふものゝ嚴しさに觸れる爲めかも知れぬ。兎も角、庭先に荒るゝまゝに棄てられてある古い溜池の、物寂びた水面を見つめてゐると、恐ろしく幽邃な感じに誘はれる、心がじーと澄み切つて、そこに漣も立てない水面そのものゝ様に、意識が止靜の境に凝つてしまつたやうである。其時、澄み切つた心の鏡の閃めいて動く一つの生命があつた。止靜した水面に音を立て、一匹の蛙が飛込んだのだつた。大地の中から目覺めて來た春の魂が、此の輕快な生き物となつて、死のやうな靜寂を蘇らせたのであつた。悠久の相に浸りきつてゐた芭蕉の心は、忽ち刹那の象に引戻された。而して、其刹那の相を通じて、再び悠久の眞實をしっかりと感得する事が出來た。「蛙とび込む水の音」と、其時芭蕉の口の上つたのは此の短章であつた。——蛙とび込む水の音——此音を彼は、彼の心を以つてしつかりと聞いた。此の音を通して彼は、宇宙に脈動する生命の寂しさを聞いたのである。此のとき口に上つた短章を補足して、彼の一句を得た。

古池や蛙とび込む水の音

實によく書いてある。「自分の孤獨な心を以つて、大きな自然の愛を感じつゝ、生きようとす
る」芭蕉の心境が、眞に如實に描かれてゐる。

私は、實をいふと、この「古池」の句をあまり好かなかつた。それは、此の句は神祕抜ひさ
れて、「この句には、常人輩の覗ふ事の出来ない幽玄な旨が含まれてゐるので、我々の兎や角と
批評がましい事を云ふべきものでない。……」といふ風な、玄妙不可思議な影が附されてゐる
ので、先づ嫌ひだつた。そして、「何んだ、平凡なくだらな句ぢやないか」と呟いてゐた。い
や、此の句が、こんな風な氣持から嫌ひだつたのは、子規の「古池の句の解」といふ、古い宗
匠達の月並臭をやつつけた、あの一文に大いに感心し共鳴したからであつた。そして子規の、
『ある種の本によると、この句の來歴が斯ういふ風に書かれてある。——一日、禪僧、佛頂和
尙が芭蕉を訪づれて、如何是生前一句と問答をかけた。すると芭蕉は、言下に、「蛙飛込む水の
音」と、眼前の物を捉え來つて答へた。佛頂は、あつと感嘆して芭蕉を禮拜した。其の場に居
合して、師の尊さを今更らに知つた門弟共は、後で「蛙飛込む水の音」といふ句に上の文字を
冠せて戴いて我等の守と致したいと、師の翁にお願ひした。すると、芭蕉は笑ひながら、「先づ
お前達なら、此の上五を何んと置くか、試みに附けて見よ」と言つた。嵐雪が先づ「寂しさに」
と置いた。續いて杉風が「宵闇や」と置いた。其角は「山吹や」と置いた。芭蕉はそれ等を眺

めて「なか／＼皆な趣きありて面白し、されど我は、たゞ事實をこのまゝ、古池や、と置くべ
し」と言はれたので、皆々更にあつとばかりに感嘆した。——我々は、こんな出鱈目を信ずる
ものではないが、いま假りにこれを事實として見るならば、私は「古池や」よりも、其角の「山
吹や」の方が更に句に動きがあつて好いと思ふのである。』

といふ意味の文章を嬉しく讀み「全くだ、山吹や、の方がずつといふ」と思つてゐた。

しかし、神祕談は兎に角として、芭蕉にとつては「古池や」でなければならぬのであつ
た。芭蕉の俳句は趣味を弄ぶ俳句ではない。自然のふところに浸つて、何等の技巧をも用ひず、
ほつと息づく様な氣持で吐き出さるゝ言葉……それが彼の俳句である。……井泉水は實によく
芭蕉を生かしてゐる。

藝術の爲めの藝術を愛し、美的陶醉の裡に悠々と遊んだ蕪村の風格を慕ふ子規が、芭蕉の「古
池や」よりも其角の「山吹や」を好いたのは、また當然であらう。芭蕉には芭蕉の藝術があ
り、其角には其角の藝術があるのでいふのだらう。「東西南北、歸りなん、いざ。夜深けて等し
く見る手巖の雪」か。

但し私は、其角の句は大たいに於いて好きぢやない。

私も勿論芭蕉の句は好きなのだが、しかし、世に膾炙されてゐるところの、謂ゆる芭蕉の名
句なるものゝ中には嫌ひなのが多かつた。殊に「もの言へば唇寒し秋の風」だの「やがて死ぬ

けしきは見えぬ蟬の聲」だの、「道のべの木樅は馬に喰はれけり」だのといふ句は、大嫌ひだつた。それは、「唇寒し」の句が妄語の戒めに、「やがて死ぬ」の句が無常迅速のお説教に、「木樅は馬に」の句が放縦のいましめに用ひられてゐるやうに、それ等の句のもつ理窟つぼさや、道徳的の臭みが、私には鼻持ちならぬ感じられるからである。

ところで、井泉水君は『旅人芭蕉』の中で、「木樅は馬に」の句を、次の如く味つてゐる。

『岡部から藤枝と、單調な倦き易い路ではあるが、芭蕉は馬を揺らせながら、あたりの景色に眼を放さなかつた。馬は雨の中に耳を垂れて、何か考へてゐるやうな、淋しい足どりをして歩いてゐた。』

驛はづれの所であつた。千里が少しおくれたので、芭蕉は馬をとめてゐた。そこらは片側に疎らな小家と木立とがあつて、家には木樅の生垣がめぐらしてあつた。平生は往還の埃を受けてゐる其の葉も、雨の爲めに緑が美しく清められてゐた。薄紫をした其の花も、露を含んで凋れ勝ちに可憐の風情であつた。と、彼の乗つてゐた馬は、鼻面を木樅の方へ伸べて、手前へ出てゐる枝の一つを啣へるや、ぐいと引寄せて、そして其の緑の色をパリパリと嚙むのであつた。芭蕉は其時うつとりした氣持で、自分を忘れて、其の木樅と馬とを見つめてゐたのだつたが、此時自分に歸つたやうに感ずると同時に、安らかに息を吐くやうに一つの句がほつと口に出た。

道のべの木樅は馬に喰はれけり

彼は斯う作つたものゝ、自分ながら餘りに無造作であることに驚いた。道端の木樅が馬に喰はれたといふこと、それは旅の途中などでは、何處にでも見られるやうな、ありふれた平凡な事ではないかとも疑はれた。けれども、彼は又、此句はこれでいゝ、ありふれた事、そのありのままの姿が尊いのだ。平凡とも見える程に自然なものこそ眞實なのだと考へた。そして今まで自分達は句を思ふ上にも、何處か一つの巧みを求めてゐた。又は其處に一つの手柄を出さうとしてゐた。それが浅かつたのだ。自然を自然のままに見る事の味ひ、此の味ひこそ、まことの俳諧の目ざす所ではあるまいか、と思ひ當ると、彼は此の一つの句を以て、今までの殻を打ち破つて、實に廣々とした地に踏み出した様に感じた。

彼はまた思つた。木樅は木樅として自分の生を茂して居る、馬は馬として自分の本能を生かしてゐる。偶々、馬が木樅を喰ふといふ事によつて、木樅の生の一部が馬の生の一部に移つて行く、その事が實に自然に行はれる、木樅はそれで平氣である、馬もまた虚心である。大きな自然には一分の増すところもなく、又一部が減ずるところもない、これでよい、これでよい、と。そして彼は、餘りにも無雜作に出來たやうなこの一句を以て、在來にない安らかな境地を探り當てた喜びを感じたのであつた。』

私はこの文章を讀んで、今まで大嫌ひだつた此の句が、こんどは大好きな句になつてしまつ

た。古池の句よりも、この句の方が好きだと感ずるようになった。そして嘗て島崎藤村が『芭蕉の句は、その句一句だけを抜き出して、例へば或る句集の、ある季題の下に並べられた句の中に見出したのでは、その眞實味が味はれ難い。私は、芭蕉の句は、彼の紀行文の中に於て味つてこそ、本當の味ひが味ひ得られるのだと信じてゐる』と言つた言葉が、今に於て成程とらなづけるのである。

私は、俗悪な宗匠どもの言葉に、餘り囚はれすぎてゐたのであつた。それ等の汚れた言葉を洗ひ落して、たゞありのまま、このまゝに、この木樫の句を深く味へばよいのであつた。

本來は極く自然な、素直な句であるのにもかゝらず、從來の俗悪な解釋や、道學者の理窟づめの臭味によつて汚されてゐる俳句は、他の人のにも澤山あるやうだ。良寛の、

焚くほどは風のもてくる落葉かな

といふ有名な句も確かにその一つである。この句は、華美や、贅澤を戒むるお説教屋の常用句となつてゐる爲めに、悟りを銜ふ、キザな悪臭が附加されて了つてゐる。だから、私もこの句は嫌ひな句だつた。

が、一昨年市ヶ谷の獄に於て、相馬御風氏の『大愚良寛』を讀み、此の句が吐かれた五合庵の脱俗な生活と、良寛の大愚振り——その人格——を識るに及んで、良寛には自分の悟りを銜

つたり、垂誠の句を作つたりするやうなところなどは、藥にしたくもなかつた人である事を知つた。そして、此の落葉の句が、五合庵の生活そのまゝを、極く自然に、ほつと一句に吐いたものである事を知つて、此の句も亦嫌ひぢやなくなつて了つたのであつた。

若し此の句が、雪中庵蓼太などといふ俗宗匠の句だつたらどうだらう。きつと、ベツ、ベツ、と唾を吐きたいやうな句に感ずるに違ひない。——斯う考へると、藝術も要するに人格だ。

芭蕉の門下で、その飄逸な風趣と、素直な童心味との句を以つて私を喜ばせてくれる人に、惟然坊がある。井泉水君は、芭蕉をして、惟然坊の句を次の如く言はしめてゐる。

『芭蕉が大垣に滞在してゐる時、美濃關の人、惟然が訪ねて來た。惟然は富んだ家に生れたが、財を守ることなどに全く心を用ふることの出來ぬ性來から、窮窟な自分の家を捨て、自由な自然に遊び、己が好む所に漂泊してゐた。彼は感興が湧くがまゝに十七字を連ねたが、俳句を作らうといふ風に考へた事はなく、推敲商量などと肩の凝ることはせず、たゞ口から吐き出すがまゝが句になつたり、又獨り言に落ちたりした。しかし、彼は芭蕉の名を聞き、風雅の上では敬すべき人である事を知つて、逢ひたくなつて來たのであつた。芭蕉は彼に日頃の吟の二三を書かした。

水鳥やむかふの岸へつういつうい

しぐれけり走り入りけり晴れにけり

などが其風であつた。芭蕉は、此の句の眞情はよい、無分別なところも面白い、けれども、俳諧の姿は斯うした一面ばかりではない。即興をそのまゝ詠む心の外に、じつと自然を見つめる心も亦なければならぬ、軽くではない、強く把握する力も亦なければならぬ、といふ事を話した。惟然は首を垂れて聞いてゐたが、どうぞ今後は門下の一人に加へて長く教を受けたいと云つた。』

天然の大きさを以て自己の心境を磨き上げた獨自な宗教家的傾向をそなへてゐた芭蕉——、自然の佗びしさを掘つて掘つて掘りぬいて、遂にあの寂しく清く澄みきつた詩の水脈を掘り當てた芭蕉——、その芭蕉が惟然の句を見て「眞情もよい、無分別なる所も面白い、が、即興をそのまゝ詠ふ心の外に、ぢつと自然を見つめる心も亦なければならぬ、軽くではなく、強く把握する力も亦なければならぬ」と、優しく穏やかに惟然を教へてゐるところ、俳聖芭蕉の面影は確かに斯ういふ風であつたらうと、うなづける。

惟然の句は、全部で四五句しか知らないから、芭蕉の弟子となつてからの彼の句がどういふ風に變つて行つたのか、私には分らない。けれども、芭蕉の終焉記たる『花屋日記』に、看護の門弟達が次の間で一枚の布團を引つ張り合つて寝た時の即興を、惟然が、

引き合ふて布團に寒き笑ひ哉

と詠んだので、病苦の芭蕉翁も思はず笑ひを漏らされた。などとあるから、其後もやはり飄逸な惟然だつたに相違ない。しかし、此の「布團の句」と「水鳥の句」とを較べて見ると、彼れ獨特の持ち味の上に、更に芭蕉の感化による「さび」「わび」といつたやうな深味が加つて來てゐる事を見逃す譯には行かない。

まあ、それは兎に角として——。私は、あの惟然の句、

水鳥や向ふの岸へつういつうい

を一句見たゞけでも、惟然といふ人がむしうに懐かしく思へてならないのである。水鳥の句は軽きにすぎるとも知れない、浅いかも知れない。けれども、芭蕉が没するや否や、互ひに正風の本家争ひをして歪み合つたり、お大名の幫間と變つてしまつたりした他の多くの門弟共には、とうてい斯る無心な無我な句は吐けまいと私は思ふ。

繰り返して言ふ、惟然の水鳥の句は、軽きに失したものかも知れない。浅いかも知らない。しかし何んといふ無我無心な、小供々々した、あどけない句であることよ!! 大人になつてもこんな小供々々した句が吐けるほどに童心の豊かな人——私にはこんな人が懐かしく慕はしくて堪らない。

(三・二二)

久太獨白『此處は名に負ふ陸奥の、秋田の獄に春立ちて、空うららかに輝けど、彼岸をすぎ

て消えやらぬ、冬の執心、残んの雪、そのしぶとさに引替へて、これはあんまり氣の早え、チクチク背を蚤一疋、人生萬事走馬燈の、廻るが如しと聞くなれど、雪と蚤とのかけ合ひは、秋田ならざア、よもあるめえ、初花姫の口説なら、紅葉があるのに雪がふる、………」

窓の雀『これ申し久太郎さま、雪が消えぬに蚤が螫す、さぞチュツ、チュ、チュ、チュ、チュ、ちゅ、ちゅらう、ござんちゅう、チュン。』

(大向の聲、イヨウ……御兩人!! 御兩人!!)

残る雪尻目に蚤をとり得たり

(三・二七)

今年になつてから初めて庭の土を踏む。空は暖かさうに青く潤つてゐるが、赤い煉瓦塀の蔭には汚れた雪が消え残つて居り、頬に觸る、風もうすら寒い。しかし、雪の解けた畑から青く芽がふいてゐる。草の色にも春は充分に覗はれる。

穴を出た我は地蟲よ庭の春

霞むなら

◇

今日は神武天皇祭。一日、二日、三日と、實にいゝ天氣だ。恵まれたるお天氣だ。夕べも、一昨夜も、大空で生玉子を割つたやうな春月は見なかつたけれども、紫に輝く匂やかな星の光を飽く事なく寢床から眺めた。

加茂眞淵が歌に「うらうらとのどけき春の心より咲き出でにける山櫻花」といふのがある。

東京邊りでは、櫻の花はもうふつくらと紅い蕾がふくらむでゐようと思ふ。望月の家でも、庭の春草が青く萌え出で、楓の芽葉が美しいだらう。そして今日は、親父が自製の竹籬を飾つて、一ヶ月おくれの雛祭でもしてゐるだらう。「白酒に酔ふて小さき吐息かな」公つべいが可愛い事だらう。

春になつてから、鶏の聲が毎日聞える、雀の囀り聲も冬の聲とは全つきり變つて了つて、歡喜そのもののやうだ。あのうつとりと和やかに、暖かく、うらうらと溶けて流るゝやうな美しい春の色が、やがて空中にただよひ満ちるだらう。もすこし庭の草が萌えたなら、黄色な蝶が飛び始めるだらう。南國から燕がやつて来て、朗らかな春の歌を聞かせてくれるだらう。

春、春、楽しい四月――。

(四・三)

◇

七日の午後だつた。教務主任が来て「中村しげから、古田大次郎の「死の懺悔」とお前の「獄窓から」とを送つて來たのぢやが「死の懺悔」はどうも見せられないから直ぐ送り返すことに

する。「獄窓から」は、まあいゝから、後ほど下げてあげる」と言はれた。

胸をとゞろかせて待つてゐると、夕方、領置係の人が持つて来てくれた。

眞紅な絹装幀の綺麗な本だ。型も新型の三五で三百九十頁ある。先づ表紙を開くと、望月が描いてくれた私の顔が現はれた。「おや、俺はこんな嫌やな面らつきなかなア、頼馬な面らつきであることは残念ながら承知してゐるけれども、この畫の顔は随分野卑な面らだ」と苦笑しながら次ぎをめくる。「獄窓から」と書いた我輩のメイ筆が、セビヤの極く濃い色の上へ黒で現はされてゐる。石版だ。これは大いに氣に入つた。次ぎは「蠅よ跳れ……」の御自筆の句だ。「ハツハツハツ、いづれも立派な字、立派な字、稚氣愛すべきものか」と悦に入つた。

寢に就いてから、むさぼるやうに本文を読み耽つた。……感慨無量だ!! 「其夜の歌」と「あやめさん宛の手紙」を読んで、また涙を落した。読み終つた時、炊夫の人達が出て行つた。

八日は、夜眠らなかつた罰で頭が重かつた。が、やつぱり時間の暇を見ては「獄窓から」を繰り返し／＼拾ひ読みしつゝ、追憶に耽つた。

今日もまだ追憶の夢心地だ。止めりよと思ひながら、いつしか本を手にしてゐる。ぢつと考へ耽つてゐる。

(四・九)

しげ女から差入れてよこした『子規全集』第十一巻の「俳家全集」中に、私の好きな惟然の

全集を見出した。美濃の人、廣瀬氏、梅花鳥落人惟然とある。梅花鳥落人……變な名をつけたものだ。惟然はよほど風變りな男だつたらしく、『近世畸人傳』とかいふ本の中にも、内藤丈草と共に其の奇行が傳へられてあるといふ事だが、一度読んで見たいものだ。

寶永七年五月二十七日歿——とあるから、師の翁芭蕉の死後、まだ長らく生きてゐたものとみえる。丈草の死んだのは寶永元年とあるから、丈草よりも後に歿した譯だ。彼の壽齡は明らないが、かなり老人になつてから死んだものと思はれる。

これで彼の句の全部なのかどうかは知らないが、ここに子規は惟然の句を百句餘り集めてゐる。「水鳥や向ふの岸へつういつうい」だの、「風呂敷へ落ちよつゝまむ夕雲雀」だのといふ彼れ獨特の句の外に、落着いた、深みのある句もかなり見受けられる。

行く春や寢覺きたなき宵の雲

臘八やけさ雑炊の蕪の味

ゆつたりと寢たる在所や冬の梅

風や刈田のあと鐵氣水

など、實にいゝと思ふ。これ等は皆な、芭蕉を師と仰ぐようになつた以後の作品に違ひあるまい。

が、私にはやはり惘然調の、無我な、流露な心情から自然のまゝに詠み出でた、無造作な句の方が、より好ましい。

松島や月あれ星も鳥もとぶ
馬の尾に陽炎散るや晝多葉紛
かるの子や首さし出して浮藻草
なんか、惘然らしくていゝぢやないか。

丈草庵を出づる時

鶯に又来て寐ばや寐たい程

翁に坂の下にて別るゝとて

別るゝや柿喰ひながら山の上

奥州のある寺に入りて

木もわらむ宿かせ雪の静かさよ

こんな句を讀むと、飄々として旅から旅を渡り歩いてゐた彼の心境が、如實に味ははれるぢやないか。

奈良の萬僧供養に詣で片ほとりに一夜を明しけるに、明けて主につかはすべき料足もなげ

れば、枕もとのから紙に名處ともに書捨ての

がれ出侍りけり。

短夜や木賃もなさでこそはしり

なんて、泊り逃げ、食ひ逃げもやつたらしい。しかし彼は、こんな乞食に等しい漂泊の旅をなしつゝあつたものゝ、彼も亦浮世の苦勞人、人の親であつたやうだ。

わざ／＼逢ひにとて來りし娘に示す

重たさの雪はらへどもはらへども

娘にあふて

兩袖にたゞ何となうしぐれ哉

はらはうとしても、はらはうとしても、どうしても、うちはらひ、振り切つてしまふ事の出來ない恩愛のきづな——。こゝに人間の「憂さ」が、そしてまた「尊さ」があるのであるまいか。

若葉ふくさら／＼と雨ながら

水さつと鳥はふは／＼ふらはふは

この句境は、何人にも追隨をゆるさない、全く彼れ獨特の無心境である。没我境である。童心境である。

句調の上では、同じく私の好きな「俳諧寺一茶」が惟然と非常によく似たものをもつてゐる。けれども、一茶の朴訥、直情、滑稽の中には「おらが、おらが」の匂ひが、即ち一茶の自我がかなり強くにじみ出てゐる所がある。それは惟然のやうな全くの没我でない。一茶の味は、朴訥、滑稽であるが、惟然は寧ろ「あどけなさ」の味ひが多い。しかし惟然の句も、

梅の花赤いは赤いは赤いは赤いはな
だとか、

於 知 足 亭

涼 まうか 星崎とやらさてどこぢや

などになると、井泉水の言葉の如く、どうも「獨り言」に墮してしまつてゐるやうだ。かうなつてもまた恐れ入る。

私が、いま、とある池のほとりか、或は極くゆるやかな流れの小川の岸かを歩みつゝあると假定する。梅雨も終り頃の薄曇つた空あひから漏れてくる。すがすがしい朝の日ざしを浴びて、岸近い水面に流れ寄つてゐる萍には、白い、みづみづしい花が微風に吹かれつゝ涼しく咲いてゐる。で、私は静かに其處へ足をとめて、その白い花や、藻の匂ひを、しばらく懐かしさうに打ち眺めた。すると其の時、足元の草むらから一疋のちつぽけな殿様蛙が水中へ飛び込んだ

と思ふと、すぐ、ひよつくりと、萍の花の陰から飄軽な顔を覗かせた。そして、私は、その風情が妙に氣に入つたので、それを句に作つて見ようと思つた……と假定する。

藻の花の陰から覗く蛙かな

私はたぶん斯んな風に作るに違ひない。が、童心味の豊かな惟然は、

かるの子や首さし出して浮藻草

と詠んでゐる。ちよいと見ると、どちらだつて大した相違もなささうに思へる。句のまじり、前句の方がきちんとしてゐるやうでもある。が、幾度も繰返して二つの句を読み較べてゐる中には、後句からは、こんな平凡な句であるに拘らず、前句では味ひ得ないところの、妙に捨て難いもの——童心から受ける一種の喜び——を感得するであらう。

何故だらうか？ それは、前句はたゞ淡い興味から生れた即興句に過ぎないけれども、後句には、無我な惟然の心と蛙の心との、親しいほゝ笑み合ひが句の中に生きてゐるからである。『かるの子や……』と惟然はほゝ笑みながら浮藻から覗いてゐる蛙を飄軽に呼びかけた。母親に背負はれてゐる赤ん坊を隣家の婆さんが『お、お、可愛い坊やだことわいの、おんぶして貰つて、さうかいの、さうかいの……』と嬉しさうにあやかす時のやうに、『お、可愛い、おんぶしかるの子や……』と惟然は呼びかけて、そして『首さし出して、さうかいな、その綺麗な浮藻草から……』と惟然の心がほゝ笑みつゝ、この句が出来たのであらうと私には感ぜられる。

「かるの子」だの、「浮藻草」だのといふ古雅な言葉を我々が使ふと、きつと嫌やなキザな句になつてしまふが、惟然のこの句からは少しもさうした臭味を感じない。

私は、斯ういふ風な句の味ひを感得する度び毎に、無我で、恬淡で、しかも温かい潤ひと、童心の明るさを兼ね有する純情詩人の尊さを讃嘆せずには居られない。(四・二二)

◇ お晝の食事を済ませて例の如く生水を一杯あほつてゐると、窓の近くに當つて「チロロロ」「チロロロ」とさみしく啼く小鳥の聲が聞えた。「おや、又あの啼き聲だ！」と思つて窓から外を覗くと、丁度窓の前のところの、やゝ空高くに張られた電線に、見馴れぬ小鳥が一羽向ふむきにとまつて、暖かな春の光を浴みてゐる。「おゝ、この鳥なのだ、先達つてから私を淋しがらせてくれたのは——」と思つたとたんに、また「チロロロ……チロロロ」と、静かな低い聲で、向ふむきのまゝ啼いた。

『おゝ、この鳥だ！』と私は叫んだ。

大きな雀と變らないが、尾が非常に短く、體に丸味をもつてゐるので、雀よりも少し小さく見える。肌の毛は全體に白く、羽は極くすんだ青と、茶との雜り色らしい。顔のところの色は、はつきり見えないが、嘴はやゝ赤味を帯びてゐるやうである。足も赤くつて可愛い。やはり雀屬の小鳥ではないかと思はれるが、何んといふ鳥なのか一向に知らない。私は、その名の知れ

るまで、かりに「ちろろ鳥」と呼ぶ事にしよう。

春風の寂しさ問はむちろろ鳥

◇ お茶の時、こんどは「ちろろ鳥」でも雀でもない、甲ン高な聲の囀りが聞えて來た。おや？と思つて窓から見廻はしたけれども、その姿は少しも見えない。が、力の籠つた高調子の聲は、どこかで盛んに囀つてゐる。

それから夕飯が済んで、暮れかゝる遅日の西空がうつすら霞んで見える頃、また高調子な囀り聲が聞えて來た。覗いて見ると、窓のところの電線に、雀の二三倍ほど大きさのある綺麗な鳥が、長い尾をピン／＼と上下に振りながら、高い聲で歌つてゐる。

甲ン高な響き渡る聲の調子と、長い尾をピン／＼と振り動かすところは、河原なぞでよく見受ける鶺鴒にそっくりである。嘴の細くてやゝ長いところなどもよく似てゐる。が、羽根の色は夕暮でよく分らないが、黒ではなくトビ色のやうであつた。形も河原に見受ける鶺鴒よりはやゝ大きい。それに、河原の鶺鴒はこんな所へやつて來て、電線の上で囀つたりなんかしないだらうと思ふ。或は「山鶺鴒」とか呼ばれる鳥ではあるまいか。

ちろろ鳥。山鶺鴒？ けふは何んだか不思議な嬉しい日である。

(四・二五)

けふは「ちろろ鳥」が夫婦づれでやつて来た。輝やかなしい旭を浴みながら、私の窓の方を向いて、電線の上に仲よく居並んで囀った。昨日は胸毛のあたりは白色だと思つたのだが、今朝見ると、翼を除く全體のむく毛は「うぐひす茶」の極く薄い色であつた。そして、首のところは濃い「うぐひす茶」と「とき色」との綺麗なまざり色であつた。赤い嘴の格好は「文鳥」を思はせるものがあるが、色は「文鳥」のよりは遙かに劣る、薄桃色であつた。

昨日見たのは、どうも雌鳥だつたらしく、雄鳥と見受けられる、初見參の方は、體がほつそりとして形がよく、尾も雌鳥よりは少々長い。彼等は、ちろろ、ちろろと啼き交しながら、互ひに頭の邊や顔のやわ毛を嘴で清め合つてゐる。乙な濡れ場を見せつけられた譯である。

ちろろ鳥けさは番ひで來りけりうつくし夫

を見せむと思ひて

春の朝の光り靜かにみだしつゝちろろちろ

ろと狎るゝ對鳥

鳩雀鳶やくだかけちろろ鳥我が幽窓のにぎ

春ぞこれ

(四・二六)

◇ いろ／＼の鳥、盛んに渡り來る。

今朝見し鳥――。

大きさ、色合、ほとんど「ちろろ鳥」に等しけれども、「ちろろ鳥」の如き首の邊りの薄紅の毛色はなく、尾は黒白のまだらなり。且つ嘴の白きこと象牙の如くに美し。啼き聲は雀に似て美音ならず、チツヒユ、チツヒユと尻をや、長く引いて啼けり。

運動場にて見し鳥――。

形、雀よりはやゝ大きく、尾は長くして黒し。羽根に黒き毛あり、また喉から頤にかけてちよつぱり黒色あれども、他は全部純白なり。顔は胴に比して小さく、頭にやゝ長き毛の見ゆれど、「冠」と呼ぶほどにはなし。全體の形よし。啼聲は甲ン高く澄みて抑揚あり、すこぶる美音なり。

暖かや小鳥に糞をかけられて

(四・二八)

◇ 教誨日。濱田さんが支那の現時局の重大なる形勢に就いて、詳細に且つ解剖的に話して下さつた。中々面白い。

英國の殖民地に對する權力失墜の話には……既に十九世紀末に於て此の事を論斷したクロボトキンの名著『田園、工場、及び職場』の正しさを今更らながら感嘆した。

次の世界的大戦争は支那を舞臺とすべし……とは、歐洲大戰の直後、炯眼なる各國の經

濟學者が叫んだところであつた。

ロシアの支那に對する野心……これは早く六年前に日本の一共產黨員に對して故レニンが打明けた東洋赤化運動の第二策である。と思つては、笑んで聽いた。

張一派の爲したロシア大使館の襲撃……張をしてこれを斷行せしめた力は——ハツ、ハツ、ハツ。

南方共產派と蔣介石派との分裂……これは勿論ロシア側の豫定だつたらうが、恐らくロシアの心算よりは早きに過ぎたらう。そして、これを早めさせた力は、日本の暗中飛躍の奏功に相違あるまい。

上海に於ける陳獨秀の銃殺……フシ——これは何んと云つても共產黨の大打撃だらう。ポーランドの醫者君やコズロフ君、健在なりや、だ。

殺し、殺され、奪ひ、奪はれ、か!! ……悲惨なものだなア、資本主義の斷末魔的狂亂の姿は——。

(四・二九)

運動に出る麗らかな春日和である。昨日は初めて地我蜂を見、今日はまた白き蝶と木の葉蝶の飛ぶを見受けた。まばらに生えた雑草にも、小さな花や柔かい穂先が現はれて來た。だのに……燕がまだやつて來ない——。

蝶々やししばし歩めば手に艶の
やよ雀つばめは來ぬか何故おそい
陽炎や靜かに据せばまどふなる
まア此のちいさな春草は!
ちさな草の小花も蝶に訪はれ顔

魚の泪

しげ女面會に來る、嬉しかりし。

持參なして差入れられし本、「良寛和尚詩歌集」「一茶と良寛と芭蕉」「萬葉全集」「萬葉以後」及び芥川龍之介君の拙著「獄窓から」を評せし日々新聞の切抜。

奥山先生より、ねむごろなる御傳言と共に金十圓也を給はる。且つ、是非一度秋田へ面會に行きたしとまで仰せられしとか。御慈愛の深さ、たまげるばかりなり。

昨日の午後から今朝にかけて梅雨のやうな雨が降つたが、けふは晝から綺麗に晴れた。キリ

ギリスの啼き聲に似た小鳥の聲が頻りに聞える。

運動に出る。未だ何ものをも植えられない畑の土が、昨日の雨に濡れて、黒く、むくむくと匂やかである。そこに生えた雑草が、時を得顔に伸び青むである。眼をあげると、塀外の毘沙門さまの木立はすつかり芽がほぐれて、若葉がサラ／＼と日に映じて戦っている。その背後にたち並んでゐる白雲の形も、夏の近づいた事を知らせてゐる。東側の運動場を覗くと、監房の際へ先月あたり植えられた躑躅が、瘦せこけて細々とした葉のない枝ながら、眞紅な花をポツポツと三つばかり咲かせてゐる。

白い蝶が二つ、畑の上を飛んでゐる。今年の春は、私の好きな黄色の蝶を終に見なかつた。

雲よ躍れつゝ、ぢは枯れで花三つ

◇

病みふしのつれづれに、『良寛和尚詩歌集』を讀んでみると、次のやうなうれしい長歌に讀み當つた。

白髪

かけまくもあやにたふとく、言はまくもかしこかも、ひさかたのあまの尊の、み頭に白髪生ふる、あしたには臣をめさしめ、白がねの毛ぬきをもちて、その髪をぬかしたまひて、白がねの函にひめおき、天つたふ日つぎのみこに、傳ふれば日嗣のみこも、樛の木のいやつぎつ

ぎに、かくしつゝ、いつたへますと聞くがともしも。

白かみはおほやけものぞかしこしや

人のかしらによくと言はなくに

世にみつるたからといへど白かみに

あにおよばめや干々のひとつも

これはたぶん『古事記』かなんかに記載されてある事柄だらうと思ふが、そのいみじくも古りにしならはせが、良寛といふ人格を透して歌ひ出されて、一層趣味ある事に思ひなされるではないか。

「ほそのを」などといふ、むさいものを我々のかたみに遺すより、白銀の白髪を遺す事の方がどれほど趣味多い事かも知れぬと思ふ。が、現代人のやうに散髪してゐては、極く短い毛しかないから一寸困る。それぢややはり趣味が薄い。どうしてもやはりやゝ長くなければ面白くない。眞白な色の、軽さも軽くなよ／＼とした髪でなければ、「世にみつるたからといへど白かみにあにおよばめやちのひひとつも」といふ尊い感じが起らない。また、いくら長く伸ばしても、私のやうな若白髪ぢや駄目である。若白髪も同じく白い髪ではあるが、それはまだごわ／＼としてゐて重みもあり脂氣も抜け切つてゐない。それでは、やはり尊さが少ない。老いて老いて脂つ氣も、重みも、光も、すつかり無くなつてしまつた奴にかぎる。が……禿げ頭は一寸困る

「なア……あごひげでも伸ばすか、呵々。」

(五・一九)

あゝ、嫌やな聲が聞えてくれねばいゝにと思ふ言葉が聞えて来る。監房の中へまで聞えて来る。

「薬、薬とうるさい奴だな。病氣だか何んだか知れやしないやうな恰好してゐるくせに——。」
「全くですよ、ねえ、擔當さん、また夕食を残したでせう。あれはきつとまた明日寝る心算なんですよ。」

「チエツ！」

(五行抹殺され不明)

——まさか、わざと聞えよがしに喋る譯けでもあるまいに、ハッキリと聞えて来る。あゝ、こんな小さな忍び聲すら聞き漏らさないほど、私の耳は鋭く尖つてゐるのだ。心は尖つてゐるのだ!!

抑へよう抑へようとしても、こんな聲が聞える時、怒りに燃えた血は、はげしく胸の邊りへ込み上げて来る。

「怒るな、氣を大きく持て。下らない人間の云ふ言葉なんか蚊が鳴いてゐるんだと思へ。そんな事を一々氣に懸けてゐては體がもたないぞ!!」と、こみ上げてくる怒氣を叱りつける……い

つの間にか涙が泌むで来てゐる……。

(五・二四)

「俺は馬鹿だなア」と思ふ。

教務主任より、過日しげ女の齎らせし芥川龍之介君の『獄窓から』評を讀み聞かせて貰つた。ただ好感を以つての紹介であつて、批評といふほどのものではない。君もやはり『歌は俳句よりも遙かに落ちる』と云つてゐる。さうかなア。歌だつて、三つ四つ位はちよいといひのある筈なんだがなア……呵々。芥川君も『鬼瓦』とか號して、一時は僕等と同じく『日本人派』の一句黨だつたと江口渙君から聞いてゐるが、僕の『鐵窓三昧』の中から、

の どの 中 へ 薬 塗 る な り 雲 の 峯
麥 飯 の 蟲 殖 え に け り 土 用 雲

などといふ主觀の強くない句をあげてゐる事を思ふと、君は多分、蕪村の句境を愛する人がらうと想像する。

(五・二九)

自然法爾

今日からまたカスリ織りを始めた。

織糸を浸せる水や風薫る

(六・一)

昨日あたりから、またそろ／＼足がむくみ出した。夕方近くになると、眼がチラ／＼と動くやうで、ばたん、ばたん、と織る箴の音が頭の心に響き込む。そして、吐く息に慄えを覚え、心臓のあたりが苦しくなる。今日はお晝に鼻血が出て困った。

停滞してゐた血が俄かに動き出したので、ここ一二週間は體の諸所に變な現象が起るだらう。が、この月中には、體の調子も馴れ整ふだらうと思ふ――。

午後になつて體が疲れてくると、カスリの調子も亂れてくる。箴が入りすぎると思つて軽く打つと横糸が餘り、おや、しくぢつたと力を入れて打つと、こんどは又、短いカスリが出来上つて了ふ。

――私が初めて大阪で新聞配達夫になり、自炊を始めた時であつた。一日、豆腐の汁を作らうとして醬油を入れ過ぎた爲めに水を注した。すると今度は水を入れ過ぎて水臭くなつて了つたので、また醬油を入れた。すると、また辛くなつて了つた。水を入れ、醬油を注しして、終に汁が鍋から溢れ出してもまだ味が整はず、皆んなに大笑ひされた事があつた。

機織りに困りながら、こんな古い事を思ひ出して苦笑した。

機織りは、姿勢が正しくないとカスリも正しく織れないやうである。姿勢が正しければ箴の

力の入れ方も亂れないで打てるやうである。

嘗つて弓を引く人から『弓は的ばかりをいくら狙つても當りはしない。一等大切なのは姿勢である。姿勢さへ正しく爲し得れば、矢はひとりでの的に當るものだ』と聞いて、いやに儒教家みたいな口吻を吐く奴だなとキザに思つて、心中ひそかに嘲笑した事があつた。が、近頃はさうした言葉がはつきり腹に落着くやうになつた。嬉しいことである。しかし、その姿勢がなかなか正しく整はない。

獄窓で獨り機の音を響かせてゐると、やはり此の秋田縣の米女鬼山(少し違ふやうだナ)下で、獨り寂しく機を織つてゐるときいた俳人安齋櫻碗子君の事が思はれる。君は若くして肺を病み咯血した時、その血の碗子を美化して櫻碗子と號するに至つたと、碧梧桐氏の『一日一信』で讀んだと思ふ。櫻碗子には、機を詠んだ澤山な好い句があつたやうに思ふが、今は少しも思ひ出せない。

(六・三)

久し振りに訪ねて下さつた濱田さんの曰く、

『きのふ、かつこ鳥が啼きましたね。』

郭公鳥!! 郭公鳥!! では、あの聲は郭公鳥であつたのか……。私は昨日きいた。又、今朝寢覺めにもきゝ、運動に出た時にもきいた。が、私は知らないものだから、鳩だと思つてゐた

のである。随分高音に啼く鳩だ、山鳩は家鳩よりも遙かに高い聲で啼くときいてゐるが、或はその山鳩が近くの杜に渡つて來てゐるのかも知れない、なども思つた。それで、けさ、

毘沙門の宮の青葉にこもり鳴く鳩かもきこ
ゆ寐覺め閑かに

と歌つたのであつた。

夕ぐれ近く、御飯を喰べてゐると又、くわつこう、くわつこう、とゆつくり三聲ほど眞上の空を鳴き渡つた。高閑な趣きのある聲である。こんどは郭公鳥だと聽いてゐたのと、眞上を鳴き渡つたのとで、全く體中を耳にして聽き惚れた。

濃淡の幾しろ雲ぞ郭公鳥

白雲と青葉のあひや郭公鳥

麥飯の大塊りや郭公鳥

郭公鳥の聲には、高踏的な感じが深い。好きな聲だ。高踏的な趣きと云つても、其角の句の「日の春をさすがに鶴の歩みかな」だの「琴焼いて酒あたゝめむ水鶏の夜」(?)などのやうな高踏味はあまり好まない。此の、郭公鳥の鳴き聲の高踏味が好きである。少し比較が變だが……。

濱田さんはお國の能登へ歸つて居られたやうに聽いてゐたが、けふのお話では、京都で結婚

式を擧げられて、あの附近を新婚旅行されてゐたのであるらしい。

宇治川では、既に螢が飛んでゐたとか。宇治川の螢と石山の螢は、大きいのと傳説があるのとで有名である。一茶の句に、

合戦や石山螢宇治螢

なんてのがあつたが、まづい句だ。芭蕉の、

螢見や船頭すでに酔ふてあり

の方がいゝ。それよりも、

螢火や岸にしづまる夜の水

といふ太祇の句は更にいゝ。私は、あまり澤山に飛び交ふ螢よりも、誰れやらの詩にあつた『一點山螢照寂寥』といふ趣きが好きである。

宇治……若葉青葉の宇治山……新茶の匂ふ宇治の里……鮎と螢との宇治川……時鳥の鳴く宇治……平等院、橋姫、通圓茶屋、興聖寺のある宇治……少し離れて黄檗山萬松寺……いゝなア、いゝなア、いゝなア!!

私は、宇治へは前後三度ばかり行つたが、明治四十二三年頃の秋、大阪から初めて行つた時の印象が一番強く頭に残つてゐる。

あの頃、京阪電鐵は既に出てゐたかと思ふが、宇治へはまだ通じてゐなかつた。私は確か

京都から汽車で行つたやうに覺えてゐる。宇治橋の傍りで茶の木人形と繪葉書を買ひ、橋の欄干の上であちこちの俳句友達に送る繪葉書を書いたのだつた。平等院の古びた池には、あやめの返り花が二つほど夢のやうに咲き、その青い葉の上には赤蜻蛉が寂寞としてとまつてゐた。それから船で向ふ岸へ渡り、汀にある石門をくぐつて興聖寺の坂路を登つた。あたりの樹は濃き露に濡れ、路上には黄葉紅葉が散り敷いてゐた。私は手帳と鉛筆を手にしながら、その坂の途中に佇むで句案に耽つてゐると、下手から「ホウ」「ホウ」といふ懸け聲を立て、十名ほどの雲水僧が、二人づつで大盃のやうな物を荷ひながら登つて來た。墨染の衣に繩のたすきを掛け皆んな跣である。何を荷つて來たのかと思つて途をよけながら覗き込むと、それは水につけられた白豆腐であつた。折から、その豆腐盥の中へ、綺麗な柿紅葉が露とともにヒラ／＼と散り込んだ。

私は、あの豆腐買ひの雲水隊から受けた何んともいへない崇嚴な味ひは、いまだに忘れることが出来ない。

(六・四)

閑古鳥といふのは郭公鳥のことだといふ説があるときいてゐる。が、

足跡は字にも讀まれず閑古鳥
山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

などといふ蕪村の句を見ると、閑古鳥は實在する鳥ではなく、閑寂の境地からはぐくまれる心境が詩化された、一種の象徴——即ち想像上の鳥のやうである。けれども、芭蕉の、

うき我れを淋しがらせよ閑古鳥

といふ句を讀んでの感じは、單なる想像上の鳥である閑古鳥よりも、實在する閑古鳥とみる方が却つて深く味はれるやうに思ふ。そして實際、芭蕉の此の句の閑古鳥は、郭公鳥を詠んだものではあるまいかと思はるゝのである。

と云つても、想像上の鳥としての閑古鳥を句に讀むのはいけないなどと云ふのでは毛頭ない。俳句の季題には「みゝず鳴く」「龜鳴く」といふのがあり、「養蟲」も鳴くものとして取扱はれてゐる。更に「山芋化して鰻となる」「雀海に入つて蛤となる」「田鼠化して鶉となる」「廢草化して螢となる」といふやうな奇抜なのがある。和歌にだつて、「時鳥の落し文」などといふ題がある。詩人は、生物學上の知識よりも「感じ」を尊ぶ。そこに詩人の跳躍性があり、神祕があるのである。

けれども、或る人は閑古鳥か實際上の鳥——即ち郭公鳥の別名として詠じ、或る人はそれを想像上の鳥として詠ずるなどといふやうな混雜は、今後避けた方がよくはないかと思ふのである。閑古鳥の文字は想像上の鳥にのみ使用し、實在上の閑古鳥は原名の郭公鳥、鳩鳩、などと書くといふ風に。

(六・五)

◇
 教誨に出る。秋田路を演壇に飾つて、未だ見た事のない私達の爲めに見せて下すつたのは有難かつた。周圍三寸餘り、丈は四五尺と見受けた。が、濱田さんの説明によると、これは未だ完全に育ちきつてゐないので、もつと大きく、莖の直徑二寸餘、丈は猶ほ七尺位にまで伸びるのださうである。

秋田路の蔭から聞くや郭公鳥
 はどうだ、呵々。

けふの『リズムに就いて』といふ教誨中の挿話に、英語會話に巧みな某公使が倫敦で演説した時、英人は感心して聞いた後に相語つて、『日本語といふものは英語によく似たものだね』と云つたといふのであつた。

私はそれを面白く聞きながら、我がイワン・イワノキツチ・サルスキイ君事岩佐作太郎老がなした米國シカゴでの大演説の逸話を端しなくも思ひ出した。

今から十五六年以前、内地で起つた某重大事件のために、彼は、エマ・ゴールドマンやベルクマンなどの後援の下に、シカゴで獨り演説をやる事になつた。問題が問題だつたので、大會堂はぎつしり人を以て埋められた。その日、彼は三四時間に亘つて大演説をやる積りで、英文

ですつかり草稿を構えてゐた。さて、開會となり、アメリカの同志の長い／＼紹介のあつた後、小つぽけな彼は、胸をそらせて壇上に進んだ。聴衆は拍手足ふみ歡呼して彼を迎へた。その静まるを待つて、彼は草稿を擴げながらおもむろに論じ出した。ところが、こんどは、名文句を吐くのに向拍手が來ない。すると、彼を紹介した男が突然岩佐君の傍へ進み出て、

『馬鹿!! 馬鹿!! 君の英語なんか米人に通ずるものかね、會場も廣いのだ、後半分へはともそんな聲では届かない。かまはぬから日本語でやれ、どうせ内容は聴衆に分りつこないのだから、君の喋りたいだけ喋つて、足踏みし、卓を叩き、大いに興奮して熱狂して見せろ、それだ。』

とさ、やいた。そこで俄かに彼は日本語でやり始めた。日本語でやれば、自然感情も熱してくるし、聲も腹の底から出て來る。彼は思ひきり壇を踏み鳴らして怒號した。すると、聴衆はただ譯けもなく喜んで拍手した。小さな男が何か怒鳴りながら壇上で跳ね狂ふ度びに、前半部の聴衆が拍手歡呼する。すると、それを見習つて、何も聴えない後半部の聴衆も相和して拍手歡呼する。かくて、すばらしい熱狂裡に其の演説は了つたのである。

その翌日、岩佐君が寢呆け眼で朝の新聞を見ると、驚く勿れ、四段抜き初號活字の大みだしで『日本のアナキスト岩佐作太郎氏の英語大演説』と題して、しかも新聞の一百半に亘る大演説が、岩佐君の全然知らない内容の大獅子吼が、堂々と載せられてゐた。その時には、流石の

落ちつき屋岩佐君も『ウム……』とうなり聲を揚げて呆れ返り、且つ大悟徹底したといふ事である。

(六・五)

機へ當る日影をさへぎる爲めに、窓へすばらしく立派なカーテンを貰つた。不思議なもので、これで房内の感じが非常になごやかになつた。

中央の芝草は、いま菫の花盛りである。この草は、明治二十何年とかに極く僅か移植されたのださうであるが、今日では日本中の至るところに此の草が生え茂つてゐる。その菫の芝生には、紅い茨の花が咲いてゐる。近い中には燕子花も開くだらう。

日乾せし布團に蚤の機嫌かな

瓜・なすび

七八月兩月は止むを得ず筆墨に離れてゐた。それは再び「久留米がすり」を織り初めた爲め課程が不終了だからであつた。「機織り」は、六月初めから七月中頃までやつたが、やはり體の調子がだん／＼面白くななくなつて行くので、醫務主任に相談したところ、「君の體質には好く

ないやうだから止めたがいゝ」と云はれた。で、止めてしまつた。

八月は手馴れた「靴下かがり」に戻つたのであるが、機の影響か、月初めに四日ほど寢込んだので、また不終了。九月も筆墨を使へない。淋しくつて仕様がなない。そこで所長に、「科程に關係なく筆墨を許可して戴けまいか」とお願いした。その結果、「九月十月だけ、科程に關係なく特別に許す」といふ事になつた。九月二日夜、二ヶ月ぶり再び雑記帳に會ひ、ガラスペンを手にする事を得た。嬉しとも嬉しである。

次の『瓜・なすび』は、この淋しかつた二ヶ月間の句と歌とである。使用紙へ針で書いて置いたのであるが、讀めない思ひ出せないのも多少ある。それ等は残念ながら皆な捨てた。

(これ等の句や歌は、「露汁」「霞の窓」の昭和二年八月九月のところを御覽願ふ。(編者))

月の心

九月に入つてから、めつきり涼しくなつた。そろ／＼蚊帳にもお別れが近づいた。

秋 蝸をたゝむや 鏝の 微妙音 三 汀

といふ、清少納言でもみさうな優艶さはないが、黴と鼠の小便との、いみぢき臭ひある我が

白褪せ蚊帳でも、『葛紅葉宇都谷峠』、座頭文彌の亡霊の出さうな「劇趣」位いはあるからに、やはり『蝸の別れ』の情趣は味はれ申すて。
(九・三)

今日は舊曆八月十五夜である。去年は無月だったので、今年こそはと思つてゐたが、此の空模様では今夜も駄目らしい。芭蕉の『名月や北國日和さだめなき』といふ句が思ひ出される。しかし、私の窓は、満月の頃の月は、明け方近くでないと言まれないから、或はその頃までには晴れるかも知れぬ。
(九・一〇)

胃がまた少々悪い。胃散を貰つて呑む。のみながら「此の味は何んとなく厭世的氣分を起させる味だ」などと變な事を考へる。曇天が窓を覆ふてゐる。腹立たしいやうな音律で青蛙が啼いてゐる。細く蟲の聲も聽える。
(九・一一)

昨夜私は變な夢を見た。私はひどい病氣になつて監房で寝てゐた。身動きも出来ない程だつた。お醫者さんが大きな大きな、びか／＼と光るメスを手にして突立ちながら私の顔をぢつと見て居られた。窓の硝子を霰が叩き、雪も降り風も狂つてゐた。その窓ぎわに、ふく子さんと公ちゃんとしげちゃんと、桂君との顔が見えた。ふく子さんの頬には涙が流れてゐた。公ちゃん

んは指をくわえて笑つてゐた。しげ女は凄しい眼をしてゐた。望月の顔は………どんなだつたか忘れてしまつた。

淋しい夢であつた。しかし、なつかしい夢であつた。變な夢であつた。しかし、しみじみと嬉しいやうな夢であつた。

あゝ、此間、野依秀一君が『囚人の苦しみは、心持は、囚人でなければ斷じて分らない』と云つたやうに、私も『久太の此の心持は、久太でなければ分らない』と獨語しつゝ、獨り拗ね、獨りたかぶつてゐたのは大きな間違ひである。獨斷である。私の苦しみが如實には他人に了解して貰へないと同じく、私は又、他人の苦しみをも了解しない。しかも見よ、昨夜の夢を思へ!! 望月家の人々は、あんなに私の苦しみを苦しんでゐてくれるではないか。その心持は、しげ女からの手紙の文面にも、いつも溢れてゐるではないか。私の方が却つて平氣で氣樂でゐる時にも、あの人達は私の事を思つて苦しんでゐてくれる。字が書けないから手紙を下さる事も出来ず、人にも語らぬ母の心持は、なほ更ら深くあるべき筈である。それ等の苦しみは、皆な私の爲めの苦しみである。しかもその苦しみは、私自身の苦しみより遙かに廣く、深いかも知れない。それを私は考へない。そして、獨りで拗ね、獨りでたかぶつてゐる。

人の喜ぶのを見て喜ぶ者は、また人から喜ばれる。

霰がふる。霰がふる。ころ、ころ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、と窓の金網を轉つてゐる。ばら、ばら、ばら、ら、ら、ら、ら、ら、と窓の玻璃を叩いてゐる。あれ、あの白い、白いあられの玉。

笹の葉に、霰ふる音、

さらさらさら、さらさらさら、

さらさらとせる心ぞほしき。

これは良寛の歌、好きな歌。

◇

誰れが定めたのかは知らぬが、其角、嵐雪、杉風、去來、支考、許六、丈草、野坡、越人、荷兮、の十俳家を芭門十哲と云ひならはしてゐる。支考、許六、野坡などといふ俗臭芬々たる輩を數へて惟然がない。杉風なんか、僕に言はずれば談林臭をさへ脱しきつて居なかつたと思ふ。ただ芭蕉の親味な世話人だつたといふのみだ。越人はともかくとして、荷兮などを數へる位いなら、正秀、猿離、土芳、北枝、杜國を先きにあげねばなるまい。更に奥羽地方の大旅行に供をした、あの實直な句風の曾良は是非見逃せまい。

僕は、芭蕉の俳境には三段の趨移があつたと思ふ。第一は、杜甫、李白などの詩趣を追ふてゐた時代。第二は「細み」といふ事を唱えた時代。第三は「寂しをり」に徹した時代だ。尤も、

「句の細み」「侘び」「寂び」は謂ゆる正風開眼以後に於ける正風の全姿であるから、「細み」と「侘び」とを二つの時期に分けるのはちと適當を缺くかも知れない。しかし、何んと云つても芭蕉の句は「寂び」の一道を深く深く自然の奥底にまで掘り進めたところに、その眞の輝きがあるのではあるまいか。そして、眞に「寂しをり」の一道に達し得たのはやはり芭蕉の晩年に於てではあるまいか。して見れば、その意味に於て、斯く三段に分ける事も多少意味があると思ふのである。

しかし、僕がいま三段に分けたに就いては、も一つ理由があるのである。それは、芭蕉の俳境の此の三階段と、その各々を受けついでたところの門下の俳人との關係を知るに便だからである。

僕は斯う思ふ。芭蕉の第一期たる李杜趣味の深い影響を受け、そして芭蕉自らは正風への轉開と共に其の李杜趣味からも脱して了つたが、師より受けついでた李杜趣味を捨てずして、その姿の上へ更に正風の磨きを掛けたのが其角である。又、其角と共に李杜趣味を受けつぎ、しかも師の正風への轉化と共に李杜趣味を捨て去つて師の新らしき俳風の中から「細み」といふところに心を傾け、終にその「細み」の一道に進み徹して堂奥に達したのは嵐雪である。又、其、嵐、などとはずつと後れて入門し、師の句風が晩年に至つて益々澄みきつて行つた「寂」の一道の深い影響を受けて大成したのは丈草と惟然である、と。

惟然の句風を、芭蕉の「寂」の姿を受けついでものと見るのは、少し可笑しく思へるかも知れない。しかし、あの無我な、飄々乎とした惟然獨特の句を深く味ふとき、その底からにぢみ湧いてくるものは、やはり「寂」である。

僕は、僕自身の以上の見地から、眞に芭蕉門下の何哲と唱えて恥しくないのは、この四人だと思ふのである。去來、支考もまた至らざる者であると僕には思へる。謂ゆる十哲中の其他の三四は論ずるまでもない。

芭蕉の死後、其角も嵐雪も江戸の大宗匠と化してしまつた。が、流石に、去來や支考や許六や野坡などのやうに芭門の名家争ひをして、苦々しい歪み合ひは演じなかつた。しかし又、師の如く清く世を捨て、自然の天地に悠々と遊びも得なかつた。「自然に同化せよ」と教へられた師の生活の風流をそのまま受けついで、風雅の天地に身を捨てきつたものは、丈草と惟然である。この點から論ずれば眞に芭蕉の遺鉢を傳へ得た門下の俳人は、ただ丈草と惟然あるのみと云つても好いのである。

一度び「趣味」に溺れて見た者でなければ、趣味界に遊行して趣味に溺れない妙境に到れるものでない、と云はれてゐる。さればこそ「風流には何事にも淡きがよし」と云つた芭蕉も、弟子には「深く入りて淺く出よ」と句作の用意を教へてゐるのであらう。

就寢の鈴が鳴る。やれやれとばかりに布團を伸べて、その中へもぐり込む。何んだか肌寒い。もぐもぐと體をもぐ。足の先きが冷たい。足首を引つ込めて着物の裾でくるむ。と、背中が丸くなつたので布團にすき間が出来てうそ寒くなる。また足を伸ばし體を伸ばしして、もぐもぐとやる。のびたり縮んだり、首をひっこめたり又もたげたり、もぐもぐとやりながら、「何んの事はない蠕蟲の土もぐりだな」と思つて苦笑する。

蟲けらのやうに布團へもぐりけり

読んで胸の悪くなるほど嫌やなのが一茶の句中には澤山ある。

読んで堪らないほど嬉しくなる童心の句や無我な句が、一茶の句中にはどつさりある。

私は「藝術の爲めの藝術」といふ態度はいけない事だと思つてゐた。しかし近頃になつてから藝術は他の何もの、「爲め」であつてもならない。やはり藝術は「藝術の爲めの藝術」でなくてはならないのだと思ふやうになつた。貴族階級の藝術、或は遊閑藝術、或は勞働藝術、或は革命藝術、と種々の色彩の分化は起るだらう。けれども、眞の藝術の藝術たる價値は、それ等の各々の色彩に即して、然もそれ等の色彩を超越して輝き出づる「あるもの」の上にあらね

ばならぬ。藝術は、此の「あるもの」の外の何者でもないのだ。「藝術の爲めの」といふ言葉さへ必要のない、純一の藝術境に没入した藝術こそ、眞の藝術と云ふべきであらう。

「藝術は人生の爲めに存在するものでなく、人生は藝術の爲めに存在するのだ」と云つた誰れかの言葉を面白く感ずる。藝術の極致は「人間臭」を絶した所まで行かねばならぬのではあるまいか。何等の主観味の現はれないまでに、主客一如になつた境地……此處まで到らねばならぬのではあるまいか。

斯く考へ來つて、僕は蕪村の客観句の深さを思はざるゝのである。

◇

確か『旅人芭蕉』といふ本の中だつたと思ふが、井泉水君が『子規のやうに、芭蕉の句は主観が勝ち過ぎてゐるからまだいけないといふのも見方が浅い』といふやうな事を書いてゐたと思ふ。一應は尤もな言ひ分である。けれども、だからと云つて、若しそれを逆に『芭蕉の句は主観的だから好いのである』といふ事になると、ちと變である。まさか「古池や蛙とび込む水の音」よりも「やがて死ぬけしきは見え松の蟬」や「塚も動け我が泣く聲は秋の風」などの方が、より好いといふ譯けでもあるまいから。

井泉水君に云はすれば「古池や」の句は、芭蕉の主観が自然の奥底にまで徹した句である。言はば大主観の句である。更に井泉水君に云はすれば「荒海や佐渡に横ふ天の河」さへも主観

句であつて、それは單に自然を観るといふ態度から一步深く、自然を聴くといふ境地にまで進み入つた句であるといふ。

では、井泉水君が見て以て客観句と爲すものはどんな句であらうか。さういふ意味でなら、どんな句だつて主観句ならざる句はよもあるまいと思ふ。太祇の「山吹や花に葉に葉に花に」だつて、やつぱりさういふ意味での主観味はあるだらう。西田幾太郎氏の哲學に従へば、純客観界といふものは「自我の自我」の世界であつて、吾等が普通に客観界と見なすものは自己の創造したるもの、即ち純主観の世界である、といふ事である。

かうなつてくると、主観句が客観句で、客観句が主観句だといふやうな事にもなつてくる。主観と客観との大混亂だ。此處だ、此處だ、問題は。

芭蕉が杜國の墓前に手向けた、

塚も動け我が泣く聲は秋の風

と、蕪村が太祇の墓に手向けた、

線香やます穂の薄二三本

とを比較して見る。單に句の姿から云へば、芭蕉の句は主観句で、蕪村の句は客観句たることに誰れも反對はすまい。しかし、此の二つの句を深く味ひ、作者の心境と句を讀む者の心境とが、ぴつたり相觸れ合ふとき、蕪村の主観が、決して芭蕉の主観よりも淺くないことに氣づ

くだらう。否、むしろ蕪村の句の方が、故人を憶ふ情味がより深く感得されはしないだらうか。「泣く」と云はないところに、「云はぬは言ふにや勝る」的のものが味はれはしまいか。「維摩の黙」なんかを引合ひにするまでもなく……。

子規の言葉は、此處から更に味ひ直すべきではあるまいか。

◇

二三日前に来た『人』誌の一面に、男女の二人の子供が、各々鳩を抱えながら、嬉しさうにほゝ笑んでゐる寫眞が出てゐる。嬉しい寫眞だ。じつと寫眞を眺めて居ると、獨りでにほゝ笑まれて来て、自分も小供の昔に返つたやうな、伸びくした、晴やかな氣持になつてくる。

私がまだ市ヶ谷にゐたとき、一枚の小供の繪葉書を愛好して、常に積み布團の上に飾りたてて楽しんでゐた。それは、やはり二人の幼ない小供が、さんざ遊びつかれた揚句と見えて、一人は玩具の太鼓に寄りかゝり、一人は手に桴を持つたまゝ、無心の眠りに陥ちてゐる寫眞だつた。現物は人形らしかつた。まだ裁判の最中、いろんな考へ事をして、いろ／＼と暗い氣持になつたとき、あの繪葉書をしばらく見つめてゐると、總べての問題を忘れきつて、晴れやかな氣持になり得る場合が多かつた。私は、今この寫眞を眺めながら、ふとあの繪葉書を思ひ出したのである。當所の領置で、あの二人の小供は今猶ほ無心の眠りに耽つてゐる筈である。健在なれ／＼。

あの繪葉書は、市ヶ谷の教誨師の江澤さんも大いに氣に入つたと見えて、私の監房へ來られる毎に、あれを手にとつてつくづく眺めながら、『實に好い、實に好い』と言つて居られた。又『この左の方の小兒の顔は、先日某所で拜見した木食上人のお顔にそっくりです』などとも云つてゐられたつけ。

子供の木食上人君よ、君とは市ヶ谷以來お別れになつてしまつたが、私はこんど君達のお友達で、鳩を抱えて笑つてゐる二人の子供と近づきになるよになつたから、喜んでくれ。この二人の愛らしい子供と語り合ふとき、私はきつと眠れる君達のことを思ひ出さずには居ないだらう。

◇

本年も暮の三十日となつた。我々囚人もけふの午後かぎりて本年の作業しまひである。午後から大掃除をする。頭から手拭をかむり、長柄の箒を借りて、先づ天井から拂ひ始める。きれいに見えてゐても、拂つて見るとかなり蜘蛛の巣などが溜つてゐる。火を焚くことはなくつても、いつ何處から來るものか知らぬが、煤も少々落ちてくる。一茶は、

煤掃きの世話のない身を涙かな

と詠んでゐるが、その一茶の世帯よりも更らに世話のない我が家の煤掃きも、手拭を冠つて天井を掃いたりなどすると、どうやら娑婆めいた感じが出て來て、『此所も浮世の年の暮』と獨

り言、獨り笑ひまじりで、煤を掃き終る。

吹き來り吹き去る風に掃く煤や

◇

いよ／＼大晦日である。さて改つて年末の感じとやらでも書いて見よらと思ふが、別に改つた感想も浮ばぬ。

みそか

今日は晦日の大晦日

今年もこれで終るかなア

泣いてもみたり

笑つてもみたり

夢路で君と逢ふたのも

それも

これも

あれもみな

今年の小さな歴史だらう

今日は晦日の大晦日

今年もこれで終るかなア

こんな民謡詩が『人』誌の歳末號に出てゐる。夢路で君に逢ふたのも……なんて、まるで私の事そつくり、私の今日の感想そつくりだ。で、これを轉記して以て歳末の感としよう。

今日は教誨はなからうと思つてゐたのに、教誨があつた。所長と教務主任との話があつた。そして、所長から一場の訓話の後で、いろんな規則の改正になつた事を告げられた。その中に、刑期三年以上の者で、遠地のために親兄弟との面會の出來ぬ人々は、寫眞を撮つて送る事が出來るといふ一條があつたのを、嬉しく聞いた。私も、姫路の母があまり心配してゐるやうなら、此の壯健な姿を寫眞に撮つて貰つて送ることが出来るのである。こんどの手紙にそのことを書いてやつて姫路へ言傳て、貰ひ、若し母が是非欲しいと言つたなら、それをお願いしたいものである。

夜。雪、霰、風強し。電燈消ゆ。

濱田さん。

お目にかゝると、何故だか言葉が出なくなつてしまひます。で、此處に書きます。

今日まで種々と温いお心持でお導き下さつたことは、深く御禮を申し上げますが、こんどの私本

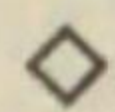
問題はどうか考へても我慢が出来ません。親鸞の教へにも、禪にも、結局私は救はれ徹することが出来ませんでした。私は、やつぱり苦しみなから、泣きながら、盲目的感情のままの修羅道を行います。

(日附不明)

秋
田
か
ら

秋田からの手紙は、すべて中村しげ子君宛てになつてゐる。刑務所の都合を考慮して、發信受信ともに、同君を煩はしたのである。

— 編者 —



【大正十四年十二月十三日】

漸くの事で此の手紙を書かせて貰ふことになつた。九月以來だから、一寸久し振りだ。皆々無事壯健の事と信ずる。

先達つて、近藤君と共に桂（望月）君が面會に来てくれたのは、大いに嬉しかつた。厚くお禮を言ふ。近藤君へは残念ながら發信は許されない。逢つたついでによく禮を傳へてくれ。面會の時に兄貴が見て行つた通り、僕は此處へ來てから更らに太つたやうだ。十月に一寸痔をやつたが、直ぐ快くなつた。其後、大いに丈夫だ。安神あれ。

面會のとき尋ね落したのだが、僕が東京で最後に出した戯畫の手紙や、萬年筆や、僕の遺筆『鐵窓三昧』『あくびの泪』など皆な届いたかね。それと、松谷辯護士に送つた參考書と布施辯護士に送つた最後の分とは落手されたらうか。殊に、松谷辯護士に宛てた分（『死刑を直視しつ』）は、今度の事件に對する僕の感想の唯一のものとして信じてゐるので、心懸りだ。

本、筆墨は、規定によつて入獄後六ヶ月、即ち來春三月下旬でないかと許可されない。それも、行狀善良、作業課程終了の者でなければ駄目だ。僕は、行狀は優等だと稱されてゐるが、作業

課程は半分しきや出来ない。三月までには是非終了に達せねばならぬので、當今はそれに一心不亂だ。何にしる、君も知つてゐる通り、僕は本を讀まねば生きてゐられないといふ困り者なのでねえ、呵々。

ところで、筆墨は所持金で買へると思つてゐたのだが、十圓以上持つてゐないと使へないのださうだ。で、三月中旬までに十圓送金してくれないか。そして、その序でに、改良半紙百枚、毛筆細字用二本、雜記帳五冊をも郵送願ひたい。本は既に取揃へてある對譯英文叢書の中で極くやさしいのを四五冊と、原書では、一度東京の獄へ入れて貰つた『ライフ・オブ・デス』と、社にあるフアブルの通俗科學叢書の中の（天文か物理の分）一冊と、都合二冊願ひたい。和文のものは當分いらぬが、俳句集を一冊是非欲しい。探して買つてくれ。後はまた後だ。

先達て東京區裁判所から書類が此處へ來て、僕に、大正十年何月とかの裁判費用一圓五十錢を支拂へとある。飛んだ古い借金を見つけ出されたものだが、よく分らないから山崎（今朝彌）君の處へ廻送して貰つて置いた。もしあれが當然支拂ふべき金で、そして山崎君が立てかへて支拂つてくれたようなら、これも濟まないが返済して置いてくれ。無料辯護をさせた上に、裁判費用まで支拂はせちや、ちと氣の毒だからなア。

キミちゃんは來年から確か學校だなア。「久バカを忘れちやいけないよ」と傳へてくれ。大ぶ寒くなつたが、まだ雪は積らない。毎日々々殆んど風と霰と霰ばかりだ。例年十一月末

から雪が降り出して十二月初旬には可なり積るんださうだが、今年は暖くて未だ積らないのださうだ。今日なんか餘程寒く感ずるが、寒暖計は十三度ださうだ。去年の今頃は四五度だつたとの話。寒に入れば零下五度位の由。しかし、寒さよりも毎日の陰鬱な天候には大閉口だ。雷がよく鳴る。北國は、夏でなく、冬に雷が多いのださうだ。風は随分はげしい。大風の日には、日本海の沖鳴りが聞へる。部屋は廣くて清潔だ。窓は東京の方を向いてるから、西日が少し差入るので嬉しい。が見えるのは空ばかり………それも一週間のうち五日まで風雨が曇りかだ。鴉と鳶が多いやうだ。鳩も少し居る。雀は少ない。

東京監獄では平均一日に二通の手紙を受取つてゐたのに、此處へ來てからは一回もまだ來ないので大いに淋しい。返書待つ。しかし、東京でのやうな譯けには行かないから、手紙の文句は、よく氣をつけて慎重に願ふよ。折角くれた手紙が讀ませられないやうな事があつては、余りに残念すぎるからなア。では、又、次ぎは二月だ。皆んなによろしく。

近詠 二首

壁の上におちつと動かぬ蠅一つ冬をや眠る息
やとだへし

壁の上におちつと動かぬ蠅のごと我れも命を
此處に終るか

返事をくれる時、一寸姫路の兄の處へハガキを出して、書き添える事はないかと尋ねて見てくれ、お願いする。

◇ 【大正十五年二月十一日】

一月十三日附貴翰十八日拜見。お察し通り、始めは雁の如く、次に鶴の如く、時経つては麒麟の如く、大いに伸首して待てり。しかも披見に及んで、僕よりの依頼せし事情の爲めに遅れたるを知り、恐縮、大恐縮、首は忽ち龜の如く引込み了んぬ。思ふに國元の兄共、僕達との文通を氣味悪しと思ふ爲めなるべし。又是非もなからんか。以後は不問々々。

僕の手紙集發刊のこと素より異存なし、萬事お委せせん。たゞ編輯者の參考までに我見を述べんか、手紙の提出は各持主の自由意志に任せ、しかも駄文、樂屋落ち等の抹殺に意を用ふべき事。廣く集むべき事。近藤君に編輯の後見を願ひたき事。俳句和歌の類の、後に改めしもの多くあれば「あくびの泪」「鐵窓三昧」等によつて夫々訂正されたき事。従つて江口渙君の出版を引受けられし「句集」發刊は見合すべき事。若し寫眞版の企てあらば、例の「蠅よ跳れ……」を願ひたし。顔の寫眞は嫌々。へちま(望月)君に簡単な面のデッサンでも願へればよし。書名は「獄窓から」など平凡でよくなきや。猶ほ淋しければ多くの人の短い氣の利いた「久太漫評」でも乞はんか。如何。……然し隨分本屋泣せの事なるべし、呵々。

單衣にレインコートの寫眞の僕に、福子さんが暖くピロッド服を着せて下されし由、お蔭を以て極寒の獄中に在つて風邪一つ引かず、有難う!! 彼の寫眞は、逗子でも鎌倉でもなし、同じ相州の鶴沼也。確か十年の夏なりしと憶ゆ、大杉と共に鶴沼東屋旅館に滞在して「昆蟲記」繙譯の助手をなせし時に、大杉が遊び半分に寫せしもの一つなり。いま當時を追想し轉た感なきあたはず。魔子にも愉快なりし記憶の一つなるべし。

山鹿(泰治)二世出生し直ちに大次郎襲名と聞き一首あり、曰く、

悪因に悪果のありてくくり願

兩手の手首を輪の入るらむか

この歌、氣の弱いお美賀さん(山鹿の細君)には極内々々。

送附を頼んだもの全部送るとのこと感謝に堪えず。ところで、もう少々無心を付け加ふ。半紙百枚を二百枚と訂正。東京監獄で使用してゐた「辭林」と年鑑とを同時に願へれば幸甚。古田(大次郎)君の遺稿も見たし。先きに依頼せし「俳句集」、もし適當のもの見當らねば、久米正雄君に僕が頼んだと云つて、碧梧桐選の「續日本俳句鈔」二冊を借りられたし。

小生の作業振り、其後、刮目に價す、御安堵あれ。即ち謹賀新正の餅の力、御馳走の力により1²の能力は忽ち3⁵と進み、加ふるに懷中湯たんぽを二個抱かざるに至り更に2³に騰り、二月に入ると同時に、課程の頂上に登りては落ち、登りては落つといふ姿なり。今一

息、今一步。

僕の健康に對する奥山先生の御注意厚く受く。深く謝すの旨、傳聲あれ。禪書は讀めど、寒時には身を寒殺する底の悟道には達せず、靜座、屈伸法、冷水摩擦を用ひて寒威と善戰なしつあり。但し、苦笑を浮べて小音に申上ぐらく、大寒に入りて流石に些さか尻古垂れ、四五日前、輕き腦貧血の氣味にて一日横はれり、従つて體重も少々減少。されど未だ、東京時代よりは太り居れば安神あれ。寒さの峠も既に越えしやに覺ゆ。積雪三尺を越えず、秋田としては例年になき暖冬といふ。こんな事で最初の冬を通過出来れば、先づ幸ひとすべき也。

折々我家を訪問給はる教務主任、一日訪ふて曰く、『ホホー、だいぶ雪が吹き込んだナ。いや、これが秋田の不思議ぢやて。二重硝子の所でも矢張り吹き込んで來るのぢや、不思議ぢやナ、ハツハツハツ……』と。けだし、秋田路よりも此の方がお國自慢のやうな口振りなり。されど、秋田を初めての小生には、不思議はこれのみにあらずかし。布に包める膝小僧の凍傷。夜、着布團の表皮の濡れることなど、可なり小首をひねらされたり。兼ねて聞き及びたれど、雪雷、氷雨、怒濤の如き烈風も珍らしく、雪の凍りついた窓硝子の美しさにも驚きたり。

雪 氷雨 吹き込む窓を頼みかな

水 凜 や冷々として骨を滴る

湯 婆 を抱いて更に愚とならむ

今日は紀元節で、御馳走を食つてお休みだ。恨むらくは相變らずの曇天強風。君からの手紙 No. 4 の初め三行ばかり悪かつたらしい。御注意々と申す。

狂體 一首

柿色囚屋磨

足引きて首をちぢめて雪の降る

寒む寒むし夜を獨りかも寐む

【大正十五年四月十一日】

三月廿七日附の手紙有難く拜見、金十圓も確かに落手した、厚く御禮を云ふ。古本屋の探し歩き、内閣の爲めの司法省通ひなど、忙しい中を全く濟まない。

手紙によると、其の内に國元から兄か母かが秋田へ面會に來るかも知れないとの事だが、大いに困つた。東京から最後の手紙を姫路に送つた時、久太郎は死んだものと思つて決して面會になんか來て下さるなど、かたく斷つて置いたのに、全く困つた。此の上の面會は、ただ兩方でより多く心を痛めるに過ぎない。母の心持、兄の氣持はよく了解してゐるが、わざ／＼面會に來てくれる事は、僕をしてより多く心を苦しませるばかりだから、どうか來てくれないように、僕の心持を、も一度よく姫路へ傳へて欲しい。假りに苦しい中から旅費を作り得たとして三百里近い奥地への旅を、どうして七十歳からの老母が爲し得よう。兄が來てくれるとしたと

ところで、彼は今病身である。而もその腕一つで、僅かの勞銀で、一家を支へてゐる體だ。僕がどうして此の兄の面會を望まうや。よく斷つてくれ。そして、體は丈夫で愉快に暮してゐるから、決して僕の事は心配してくれるな、安らかな老後であらむ事のみ切に祈つてゐると傳へてくれ。くれぐれも頼んで置く。

五月に君が面會に来てくれるといふなら、これは遠慮をしないで嬉しく厚意を受けよう。昨年九月以來の久し振りの面會だ。職業婦人君の勇姿と艷顔に接し、元氣よく太つた僕の體を眼目にかけてよう。その日の、春美麗かならんことを期待しつゝさ。

手紙集に對する僕の唯一の希望は、來信一束によつて、總ての手紙を集めて欲しいといふ事である。これは手紙の種類が多趣ならん事を期する爲めと、人一倍に「多様性」を帯びたところの「久太」を充分表現したいからである。例へば、ボルの人達に送つたのも、朝鮮の魚海少年に送つたのも、大阪の不良連に送つたのも、魔子に送つたのも、それ等のもの總べてを集めて、そして其の上で近藤君の取捨選擇を煩はしたいのだ。

市ヶ谷刑務所で書いた「感想」を附加する場合は「死刑を直視しつつ」「後事頼み置く事ども」「悲痛の快味」「泣くな!!」「句作の思出」の六種だけにして置いて欲しい。久太年表は使はないがよからう。「思出の記」なんか勿論駄目さ。

「久太漫評」は、頁が許すなら、卷末に六號で並べて欲しい。僕の希望する人名を左に書いて

見る。随分澤山だから驚くな。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 近藤 憲二 | 岩佐作太郎 | △古河三樹松 |
| 川口 慶助 | 水沼 辰夫 | 山鹿 泰治 |
| 延島 英一 | 和田榮太郎 | △堺 利彦 |
| 堺 眞柄 | 山崎今朝彌 | 布施 辰治 |
| 添田 啞禪坊 | 伊串 英治 | 淺原 健三 |
| 城田 徳隆 | 中名生幸力 | 中村 還一 |
| △宮 島資夫 | 江 口 渙 | 加藤 一夫 |
| △大 杉 魔子 | 望 月 桂 | △望 月 福子 |
| 中村 しげ子 | △望 月 公子 | 魚 海 |

先づこんなものだ。△印の六名には是非頼みたいな。公ちゃんには、しやべらせて親爺が筆記すること、其他、有志があるなら幾ら多くても好い。

装幀は近藤君の意見に總べて賛成。ただ「宗匠式」だけは眞ッ平御免だ。變に氣取つたり、すね味を現はしたりしないで頼むよ。藝術味は大いに欲しいが………。

公ちゃん「『キユウキユウネズミ』の童謡を時々唱つてくれるのは大いに嬉しいナ。そのうち筆墨が許されたら、今度はもつともつと面白い、上手な童謡を書いて送るよ、と云つてく

れ。そして、その内に學校で字を習つて、片假名が書けるようになったら、久をぢさんに手紙をおくれ、と云つてくれ。

一句、公ツペイの入學を祝する。

悪戯も男兒に負けな春の風

『人』といふ刑務所の雑誌は四六四倍版八頁もので、中々面白いものだ。「社會の人が讀んでも、少しも嫌やな氣持にならないものを作りたい」と編輯者は云つてゐるが、なるほど編輯は中々苦心されてゐる。雑誌の編輯では可なり苦しんで來た僕だが、實に鮮かな編輯ぶりだと大いに感心してゐる。政界の記事もある。科學の記事もある。福子さんの好きさうなお話や詩も澤山ある。僕はこの雑誌を望月家に於ても購讀されん事を希望する。僕がどの位の程度で社會の事を知つてゐるかといふ見當も、そちらでつく譯けだ。

鐵(中濱)君がまだ生きてゐるなら『笑つて死ぬ』と傳へてくれ。そして「久太漫評」でも書かせて置いてくれ。

古田君と市ヶ谷で最後の會見をやつた時、僕が「君の死ぬ時には好い天氣であるやうに祈つてゐるよ」と云つたら、彼は「ウン……しかしこんな薄曇りも靜かに落着いていゝと思つてゐる」と云つて、窓外を眺めて淋しく笑つた。僕は薄曇りの日には、よく古田君の、あの淋しい顔を思ひ浮べる。

秋田は、全く餘寒の長い所だ。三月に入つてからは雪や霰は降りながらも太陽は春めいて來て屋根の雪が解けはじめ、庭の雪がすっかりなくなつたのは三月二十八九日頃だつた。ところが、四月に入つてから又々寒さが後戻りして、三日と五日には雪が積つた。東京は三月中頃に花が咲いたさうだが、此處はまだ、梅の花すら咲かない由。二十日頃に梅も櫻も桃も一時にはつと咲いて、直ぐ花の春は過ぎて了ふのださうな。

しかし一昨日邊りから大いに暖かくなつた。濃青の空を眺めて喜んでゐる。十二月末に漸くゐなくなつた蚤が、三月中頃から既に活動し始めた。元氣な蟲だ。南京蟲はどうやら居ないらしい。

或る禪の本の中に、

『京の四條橋の上に乞食ありけり。弟の乞食、兄なる乞食を顧みて、橋を渡り行く立派なる武士を指し、わしもあの様な武士になりたい、と申せしところ、兄の乞食は首を振り、いやいや、あの武士は、あんなに立派に見えても、心の中は色々苦しい思ひやわづらはしい事で一ぱいぢや、それよりも何んのくつたくもない俺達乞食の方が結局氣樂で結構ぢやと申しき。その時、傍に臥しゐたる親爺の乞食、むくむくと起き上り、その氣樂な境涯には誰れにして戴いたのぢや、と申せしとなん』

といふのがあつた。僕には大いに氣に入つた。そして、窓から空の美しさに恍惚と見惚れる

とき「囚人ならではの美しさは味へまい」と獨言し、更らに「その囚人には誰れにして載いたのぢや」と親乞食の聲色を眞似て、獨りで悦に入つてゐる。

一 椀の鹽茶待たる、氷雨かな
ふと閑けさの雪がこぼれた桶の水
屋根の雪のとどろと落ちて揺る、陽や
空へひたと顔つけて春を讚えけり

◇
【大正十五年六月十日】

君からの手紙は一日に落手した。そして去る六日に一度返書を認めたのだが、天候ならぬ天候が暴れて、雨が降り、風がありした揚句の果、且つお叱りを受けた上、こゝに再度の手紙を書くようになったのである。實を言ふと冬にも一度二度こんな事があつた。が、心配するといけないと思つて知らさなかつたのである。しかし、この手紙は、最初にこの事を書いて置かぬと後に書く事が徹底せぬから書くが、決して無謀はせぬから其の點は安心して、ただ以下の文意を、所謂眼光紙背に徹して、頭で讀まずにハートで讀んでくれ。

僕からの手紙は、今後雑誌に決して發表しないであらう。ただ是非とも『勞運』にだけは發表せねばならぬ場合は、極く簡単な消息だけ抜き書きにして發表してくれ。でない、今後僕の

手紙や俳句などがそのまま、世間へ發表されるれば、「受刑者に社會の雑誌の原稿は書かせぬ」といふ理由から、君との文通は「嚴密に是非必要用件の外は書かせない」と申渡された。句や歌は勿論、公子に童謡を書くこともいけなく、且つ一寸した感想にしても「原稿じみる」の一言で片づけられる。知つての通り、不平や不満は勿論書かされない。さうなれば「僕は毎日嬉しく感謝に満ちて働いてゐる。皆んなに變りはないか」と二ヶ月に一度書けばお終ひだ。そんなものなら僕は書きたくない。手紙をやらねば皆んなが心配しよう、僕にも楽しみや慰安がなくなる。……かういふ譯けだ。そして「決して雑誌へ大びらに發表させぬ」といふ誓ひの下に、この手紙及び今後の通信が今まで通り出来ようといふのだ。

そんな馬鹿な事があるか。和田もそんな腰抜けになつたか!! 卑屈だ!! と嘲罵する者が若しあつたら、和田は其の嘲罵を笑つて甘受する、と答へてくれ。

君からの手紙も、いつでも可なり切り取られる。殊に今度の手紙は「社會の出來事を澤山書いてあるから不許にする筈だが……」とて渡された。君は何枚書いたか知らぬが、僕の見たのは三枚だ。それに、二三行の切つ端が二つ三つくつつけてあつた。それだけだ。あれに望月が九州へ行つた事と、ルイズの事とが少々あつたので、僕は破り棄てた先の手紙に「マコの様子を知らせ」と書いた。ところが、これもいけないのださうだ。「大杉の子供の消息などは斷じてならぬ」といふ所長の意見ださうだ。この時ばかりは僕も口惜し涙がこぼれた。僕が大杉の子

供の消息を知つちやいけない……何んといふ事だらう！と思つた。

が、だ。が……僕はこれもあきらめる事にしたよ。ウン、あきらめたよ。だから、大杉の子供の事も今後知らせてくれても無駄だ。見せられない。同志の消息なんか勿論駄目だ。時事問題も知りたくない。『人』と『新聞年鑑』で澤山だ。書いて来るのは止してくれ、無駄だ。君自身のことでも、今後は澤山書いて来てくれ。君のいろんな感想もよからう。公つべいの悪戯ぶりや、望月が商賣に精出さない、繪も書かない、そのグチもよからう。世間の事でも、地下鐵道が出来たの、尾上榮三郎が死んだのはよからうぢやないか。庭の草花は今年はどうだい。待宵草も大きくなつたかい。お地藏さんはどんな顔をしてゐるかい。……まあ、そんな事でも面白可笑しく書いて来てくれ。僕も亦、雀や燕のいたづら振りでも書かうよ。胸につかえたり、腹に溜つたりする事は、すつぱり忘れよう。……これが僕をして『短氣を出さしめない、負け嫌ひをつつばらせない』何よりの薬だ。そして『忘』と『無爲』の妙味を説く禪書にでも親しみながら、けり、かな、とやつてゐよう。

同志との交渉を強制的に斷つたなら、それで和田の心がすつかり變る——長い内には——といふのが刑務所の自信だ。僕はただ、これに對して『微笑』をもつて答へるのみだ。

『和田君、たとへ無期懲役でも、あくまで生きてゐてくれ。決して自暴してくるな。君に長く生きてゐよと願ふのが、如何に慘酷であるかは、我々は充分知つてゐる。君が死刑を望む心

持はよく分る。だが我々は、あくまで君に生きてゐて欲しいのだ。』

と、岩佐君は云つてくれた。言、なほ耳底に在る。如何に僕が「負け嫌ひ」だつて、君の心配するやうな「病氣になつても薬を飲まない」といふやうな事は勿論ない。大いに自重してゐる。運動には三十分間庭を歩くし、毎晩自彊術をやつてゐる。體重が社會にゐる時よりも増した（これは決して負け惜しみやなんかぢやないよ）のが、何よりのいゝ證據だ。安心し給へ。

（以上九日夜記す）

×

今日は李何んとか王の國葬でお休みだ。伸び伸びした氣持で此の手紙を書く。

今、昨夜下附された『禪學講話』を何氣なく開いて見ると、巻頭に、人間萬事不如休、馳逐東西到白頭、息影山廳閑座睡、自然無喜亦無憂。人間萬事不如休、交友多同風馬車、歸去來兮何處是、白雲影裏一林丘。人間萬事不如休、此句能醫我百憂、勝彼神仙眞秘訣、永言畢世銘心頭。とある。久太子、夫れ休せよ、忘ぜよ、か。苦笑々々。

作業課程は四月に及第し、五月十五日から私本も讀め、筆墨も許可になつてゐる。雜記帳ガラスペンを購求し、英語練習の傍ら『孤囚漫筆』と題して感想や駄句を書いてゐる。だから此の手紙着次第、既に買ひ整へてある筆紙類と井上和英辭典と年鑑とを取敢えず郵送してくれ。

近藤が司法省へ内閣に持つて行つてゐる本が、何故二ヶ月も三ヶ月もグヅ／＼するのか、僕

には不思議でたまらない。が、今日只今、はつきり明瞭になつた。本の内容、内閣如何が問題ぢやないのだ。持つて行く、頼みに行く、近藤といふ人間が悪いのだ。もうもう、近藤君に司法省通ひはやめて貰つてくれ。無駄だ。僕は決心した。近藤君に『行刑局の自信を尊重しようぢやないか』と傳へてくれ。

武藏野（宮崎光男）の家は皆な變りはないか。休みには又、時々遊びに行つて、あの邊の景色の移り變りも知らせてくれ。あの家の二階の窓、安養寺の森の梟の聲、庭のすずかけの花や晝顔の花、さては辨天池の行々子、蛙の聲、杉林の蝸の夕……いつも夢のやうに憶ひ出される。先づ今日はこれで止す。この次ぎの君の手紙は、來月少し早くくれ。待つてゐる。

◇

【大正十五年八月十二日】

八月二日附お手紙、福子さんのものも、總て全部拜見。感謝々々。

福子さんお芽出度のこと、大いに歡ばし。君のてんでこ舞、お察し申す。小生への面會斷じて急ぐの要なし。姉上御安産を芽出度く相濟ませ、白雲暖流す四五月の頃、ゆつくり來られたし。此の義、かたく申置く。

小生身體、元より健。廣き雜居房を一人にて占有し、白麻の蚊帳を吊り、赤き團扇を手にし、丹田に氣を滿し、ボン／＼と叩きながら大の字に臥り申す。夜おそくまで原稿紙を汚し、猶且

つ飯の食ひ兼ねる輩、よろしく我れを羨むべし。のんきに超然と生きてゐるには、禪の遊戯三昧、最も面白きやうに思はる。來春三月まで英語中止と心に定め、それまでに大いに文字禪をやつて見るつもり。

七月初旬、紙、筆、雜記帳、落手。同末日、「井上和英」「年鑑」落手。多謝々々。「續日本俳句鈔」ゆつくりでよし。金澤の「辭林」は、「和英」があれば入用なし。あの本、宮崎に三分、僕に七分の所有權あり。現代の風潮に鑑み、我が權利の大なるをたのみて、彼の本を獨斷にて賣り飛ばし、代りに「割引」字典の古いのを買つて欲しし。「寒山詩集」が借りられたのは嬉しい。これも共に送られたし。小石川の丙午出版社で「中外叢書」の第一篇「禪室茶談」、第八篇「禪話擔板漢」の二冊を買つておくれな。各々定價三十錢、合計六十錢。活動行き一回御ケンヤクあれ、呵々。

「……地下鐵道の話は聞いたんですか」なんて、寢呆けちやいけない。それどころか、太陽の黒點が最近龜裂となつて現はれたといふ、天文學界の報告まで御存じだよ。だから言はぬことぢやない、僕の讀んでゐる雜誌『人』を購讀なさい、と。太陽面龜裂の加減か、梅雨中は暑く照り、土用はぢめ／＼雨。ハツハツハツハツ。

次の文面、小諸の福子さんに見せて欲しい。

福子さん。

久し振りのお手紙嬉しく拜見しました。先づ第一に、八年ぶりの御懐妊をお喜び申し上げます。いま五ヶ月といふと、御出産は來年の一月早々ですな。お喜びなさい、寒中に生れる子は丈夫だとか言ひますよ。東京の事なんか考へずに、藤村の「千曲川」の詩でも歌ひながら、信濃の山水の中へ全精神を溶かして了ひなさい。さうすると、きつと安々と産めて、立派な子供が「天上天下唯我獨尊」の第一聲を揚げます。

公ちやんの左利きは、飽くまで左で押し通すのも面白いと思ふんですが、學校で許しませんか。今の學校の成績なんか、出來ない方が好い位いのもです。今の學校で成績のよい子は、頭でつかちの、色の青い、ひよろ／＼した人間に仕上ります。そんな事は決して心配しないがいゝんです。氣まゝに、のんびりとお育てなさい。コセ／＼した育て方の害悪は僕がいゝ手本です。全くですよ。

まアお大切に。また書きます。姫路へ手紙を出して下さると見えますね。厚く御禮申し上げます。僕は大丈夫、御安心下さい。

みなぬちにまな子や動く夜をこめて響く千

曲の水を嬉しき

垂乳根の母がみもとに垂乳根の母と呼ばれ

む愛子産ますも

【大正十五年十一月四日】

先月二十五日附手紙拜見。秋田へ來てからの僕の手紙が、毎回「ガツカリ」さしてゐたのが、この前のは「ピツタリ」して「皆んながやつとホットした」といふのかね。結構々々。「ベツタリ」腰を抜かして「皆んながボツとなる」やうな手紙を差上げちや申譯けがないからな。ますます禪の本でも讀み、大いに修養して、大いに落着いて見せようよ。安神しな。今月の九月一日には「人の間はば秋の黄雲を指さゝむ」と一句呟いた。確かに落着いたね。

刑務所でも、僕がやゝ落着いたと御觀察に相成つたと見え、兼ねてよりお願い申上げて置いた「機織」を許可され、愈々此の一日から久留米がすりを織ることになつた。仕事の出來ぶりが水平線に達するまでの三ヶ月か四ヶ月間かは多少苦しくもあらうし、又不自由を見ねばならぬのだが、しかし「靴下の先かがり」なんかよりは、いくらいゝか知れやしない。第一、趣味があるからねえ、仕事に。ハゲ……ぢやなかつた、枯芒頭の兄貴流に言へば「藝術味」がたつぷりあるといふものだ。それに、運動不足を來してゐる體の爲めにも確かにいゝと思ふ。

雀が歌ふ窓の下で、ボタン、ボタンと織り方を稽古してゐると、阿部保名と葛葉狐との色模様を思ひ出す。蘆屋道滿大内鑑……もうあんな古い狂言は永久に演じられまい。信田森の

葛葉狐といふのは實はエタ族の女である……てな事を云ふのは理屈ぼくつていけない。昔の芝居の妙味は、理屈を言ひたがる奴には分らない。菜の花の咲き亂れた百姓家の窓で、狐の化けた戀女房葛葉が物思はしげに機を織つてゐる。彼女は先きつ頃、一子（後に有名な阿部晴明とある）を産み落した……。

一子を産み落した、と言へば、こんど生れる子供の名を付けてくれといふ事だつたな。よろしい、よろしい。僕はこれでも既に二人の名づけ親だからな。第一は山川均夫妻の振つた作物たる「振作」君。第二は現今仙臺の在所に居る有名な「中名生芋作」君。二つとも實にいゝ名ぢやないか。そこで……若し男子ならば「おふく」の子だから「ひよつとこ」……ではちと可哀さうだな……「空美」はどうだ。「あきよし」とでもこぢつけて讀ませばよい。そして若し女だつたら……やつぱり「空美」さ。女らしく「うつみ」とでも讀ますればいゝぢやないか。別に意味はない。僕は「空の色」が好きだからだ。

キミちやんと、キミちやんの仲よしのお友達に送るのに丁度いゝ童謡を二三日前作つた。

あられ

寒むい、寒むい

お空から

きれいな霰が

落ちて來た。

子供雀が

二羽、三羽

お庭へ拾ひにとんで出た。

母さん雀は

お家から

『コレ／＼寒むいよ

冷めたいよ。』

大杉全集は完結したし、マユは公ちやんと遊べるやうになつたし、もうこれで何等心にかか
る事はない。近藤君に『感謝に堪えない』と傳へてくれ。そして、僕の本なんか、決して無理
をして出さないようにと、よく云つて置いてくれ。自費出版なんかで、あんなものに社の大切
な金を使つては申譯けがないから。

今年は去年よりは、少々寒さが早いやうだねえ。昨年の雪は十二月になつてからだつたが、今年はもうそろ／＼降り始めさうな様子だ。霰は十月の初旬から降り出して、此頃は毎日のやうに氷雨が降つてゐる。

子供の時にやつたきり長らく忘れてゐた齒痛を、先月珍らしく覺えた。今、外部の醫者にセメント充填をして貰ひつゝある。白髪は、もう完全に胡麻鹽にまで進んだ。おまけに、額のところが少し廣くなつて來たから面白い。

鳩は高く秋氣の流れのぼるらし
朝寒むや蠅に刺さるゝ青頭
體操の汗拭いて蟲に獨り寝る

◇
【昭和二年一月九日】

手紙を見て先づ何よりも喜んだのは福子さんの御安産である。男の子で、しかも八百八十匁もあつたとは、何んといふ有難い事だらう。實のところ、僕も福子さんのお産は、また大變なのぢやあるまいか、どうか安らかに産んでくれ、ばいゝがと、こんな所からでも、役にも立たない心配をしてゐたのだ。お芽出度う!! も一つお芽出度う!!

「名前の頭が空ウぢや頭がからつぽのやうで」……とは御尤も千萬。實は、僕は近頃禪の本を

囓るものだから、空ウといふ字に却つて興味を感じてゐたのでつけたのだつたが、成る程、からつぽと取つちや嫌やだらうて、ハツハツハツ——。しかし「明美」は上等だ。殊にいゝ月が出てゐたから思ひついて……とは氣に入つた。賛成、賛成!

赤ん坊の生れた時は、まるでお猿さんのやうな顔をしてゐるものだが、しかし、もう今頃はそろ／＼白くなつて、笑ひ顔を見せてゐる事だらうと思ふ。公ツべいが姉さん振つて抱きたがつて大變だらう——。何かお祝ひのものをお贈りする筈だが、仕方がないから、例によつて俳句だ、俳句だ。

寒月に 凜と生れた 男の子 哉

藝術的なハタオリは、廿日ほどやつて止してしまつた。久留米かすりを三丈二尺織り、初めのものとしては實に上出來のかすりである。初めからこんなによく出來る人は珍らしいと技師から褒めて貰つたほど、それほど得意であつたのだが……止してしまつた。何故かといふに、ハタを織り始めて二三日すると、脚氣のやうに急に足がむくみ出した。オヤ／＼と心配したが、しかしそれは間もなくなつてしまつた。ところが、その内に又、今度は胃の調子が馬鹿にいけなくなり、かがんでばかりゐるので、胸の邊も痛くなつて來た。で、折角僕からお願ひしてやつとの事で始められるようになり、大いに楽しみにしたハタオリのだけれど、又もとの靴下かがりに還へして貰つたのである。

僕は最近徹底的に落着く事が出来るやうになつたやうに感ずる。外の事も大して気にしなくなつたし、頭に詰め込んである生半熟な學問の片々など、すつかり捨て、しまひたいと思ふやうになつた。その内に賞與金が溜つてくるから、年に二冊の本は買へる事になる。だから本の事もそれで澤山だと思ふやうになつた。一切の通信を断たれても、心靜かに、落着いて生きてゐられるといふ自信もついて來た。その點も決して心配してくれな。

◇ 【昭和二年三月十三日】

先月廿五日附の手紙、嬉しく拜見。

恩典は豫期しなかつただけ、それだけ喜びも大きかつた。君の言葉の如く、これで『どれだけ心丈夫か知れない。』たとへ十八年後の遠い遠い所にも、兎にかく一點の光明が認められるやうになつたのである。その遠い所の一點の光明が現在の心持の上に照り輝く力は大きい。私は嘗ての遺言的な一文の中に「この體は三年はもつまい」と書いて置いた。が、當所へ來てから、だん／＼「な、に、さうでもない」といふ自信が出て來、更らに此の度びの光明によつて、再び社會に出られるかも知れないと、夢が樂しめるやうになつて來た。喜んでくれ。

いま私の讀んでゐる『旅人芭蕉』といふ本の中に、次の如き文章がある。

『自分も随分迷つたものだ、もがいたものだ、希望から焦慮へ、困憊から懊惱へ、人間として

嘗めなければならぬ苦しみは大概味つて來たのだが、……それは、譬へば日蔭もない野を、ぐんぐんと毎日歩き續けてゐたやうなものであつた。そして、それは生きるために唯一つの道だと思つてゐたのではあるが、今から考へれば、自分は生きようといふ意志にむきになり過ぎて却つて本當に生きられなかつたのだ。自然のままに生かして貰ふ、といふ受身の氣持になりさへすればいゝのであつた。……』

近頃は斯ういふ言葉に、しみじみと親しさを感ずるやうになつた。

「獄窓から」が三月に出版されるとの事、諸君の盡力、殊に近藤君の骨折りを厚く感謝する。出たら早速送つてくれ給へ。が、集められた僕の手紙の中には、キザなのや銜氣たつぷりのや、獨りよがりなのや、與太なのや、いろいろ、今讀むと自分で自分の顔が赤くなるやうなのが多いだらうと思ふと、聊か恐れ入ると云つたやうな氣持も起る。しかし何んと云つても、僕の心持は嬉しさで一ばいだ。鶴首して待つ。公ちゃんの漫評が早く見たい。マコも書いてくれたらうねえ。

「古田大次郎遺稿」を「獄窓から」と一緒に送つてくれ。讀ませられるらしいから。皆んなによろしく。

寂しさを敲きにくるや窓霰
金網を掻き鳴らしけり玉霰

月の碎け落つるとばかり霞かな
 躍れ 躍れ 天の童の玉霞

◇ 【昭和二年五月十三日】

二十二日の休日にゆつくり書かうと思つてゐたのだが、勉強して今夜書く事にした。

一昨日はるく面會に来てくれた段、厚く禮を云ふ。十日にもまた來なかつたから、「中村の奴め、また例によつて例の如しか」と苦笑してゐたのだつたが……イヤ、御苦勞々々。面會のお別れの時、僕のお禮の云ひよう、ねぎらひようが大いに不足らしい顔付きだつたネ、あの不足分を、それでは此處へ書き足して置く事にする。有難う!! どうも有難う!! 道中お疲れさまで!!

奥山さんには、くれぐれも宜しく御禮を申上げてくれ、「あんまり御恩になりすぎて、まごつくばかりです」と。

福子さん。

御手紙有難うございました。公ちゃんの事は余り苦にしなくてもよいと信じます。が、「同じ年頃の子を見ると胸が一ぱいになつて」と言はれる母としての貴女のお心持は尤もな事です。

自由教育、個性教育は、申すまでもなく「ただ黙つて勝手氣儘にさせて放つて置く」事ではありません。教育ですもの、「教へ」育ててやらねばなりません。茶人が鉢植の松をいぢくるやうな教育は排すべきですが、子供の心の根に寄生せんとする雑草は刈り取つてやらねばなりません。又、今日の社會や道徳が悪いからと云つても、その正反對さへやれば必ず正しいとは申されません。ここがむづかしい所です。一度、學校の先生に會つて、よく御意見をきいて見て、研究されては如何でせう。さういふ事は望月君が反對ですかしら？ 私もやはり「或る程度まで教へなくては」と思ふのです。

ハゲ君、公君、明君によろしく。

◇ 【昭和二年九月二十日】

先月の手紙も四冊の本も有難く落手した。そして、三人で姫路へ行つて僕の母を訪ね、ねんごろに慰めてくれた事を讀み、且つ案じてゐた母が非常に丈夫であつた事を知つて、どんなに嬉しかつたか知れない。澤山お禮を云はねばならぬ中にも、特にこの事は厚く感謝する。

今から三ヶ月以後、囚人に對して私本を讀ませる事が絶対に禁じられた。勿論當所だけといふのではなく、全國一般なのである。が、私がこの事を聞いた時の失望と憤慨とがどんなに大きかつたかは察してくれ給へ。行刑局からの一般的達しとあれば、いくら當所長へ掛け合つた

ところで仕方のない話だとは思つても、残念さ口惜しさが胸先きへ込み上げてくる。私本が讀めない位いなら、暴れるだけ暴れて暴れ死んでやれ、といふやうな自暴自棄的な考へが高まつて来て、十八日から今日の晝まで暴れに暴れて、トンダ事をしてしまった。結局、明日私本全部をそちらへ送り返す事にしたのである。で、この手紙の着いてから間もなく、全部の本がそちらへ行き着く事と思ふ。

期間はまだ三ヶ月間ある。けれども、どうせ駄目なものなら、今からすつぱり思ひ切つた方がよいと思ふので、明日送り返す。これは君からの手紙にあつたやうな、ひねくれ根性からでは毛頭ない。誤解せないやうにしてくれ。

◇

【昭和二年十一月九日】

手紙は四日に受取つた。僕の體の事なら決して心配してくれるな。僕の心身にはあの下劑が大いに利いたとみえ、其後は却つてすつかり落着きが出来、従つて體の調子も非常に好い。

本の事も、今では何等の不自由も淋しさも感じなくなつた。「口惜しい、憎らしい、せつない」と啼く腹の蟲は、本を送り返した時、一緒に小包郵便の中へ叩き込んで置いた筈だが、なかつたかね？ ハツハツ、君の腹の中で、あの手紙を見た時に啼いたのが、即ちそれさ。君の腹の中にまだ残つてゐるなら、早くセメンの菓子でも食べて下してしまつてくれ。

とは云ふものの、そこは凡夫でね。そりや時には、ア、あの本が讀みたい、「年鑑」を見て社會の移動相を観じたい、と心がぢり／＼する事もあるさ。けれ共、近頃では、さうした欲望の爲めにぢり／＼と悩む時の自分の姿の背後から、その悩める自分の姿を、慈愛に満ちた眼でぢつと眺めながら護念してゐるところの、第二の自己が現はれて來た事を覺えるやうになつて來た。そして、此の第二の自己の力を次第に強く感じてくる事によつて、第一の自己の其の悩み方がだん／＼と氣安くなつて行くやうである。安らかな、平和な力をもつ第二の自己が第一の自己の悩み方を、一種の興味をもつてぢつと味ひつゝ、ほ／＼笑む時すらある。

此の第一の自己も、第二の自己も、共に自分以外の何物でもない、それは自己の進展の相を二つに分析して見たのに過ぎない、と思ふ時と、第一の姿のみが眞實の自分であつて、第二の姿のそれは、自分の上へ何かの偉大な不思議な力が働きかけて居るのに違ひないと思はれる時とがある。

こんな變な理屈なんか聞きたくもなからうが、一時は口惜しかつたり、狂人のやうに暴れたりしたけれども、今では極く平穩な心持に落着いて、却つて私本のなくなつたのを喜ぶ氣持さへあるといふ事を説明する爲めに書かざるを得なくなつたのでね。

この秋は、こちらは珍らしい上天氣だつたよ。美しい、澄みきつた空が多かつた。まだ今年は雪も降らない。今日なんか、暖い小春日和だつた。まだ蜻蛉と蝶が一二疋生き残つてゐる

位だ。この分では、今年の冬は去年よりもずつと楽だらうと推測される。今年は随分と雁を聞き且つ眺めた。

亂れ雁喜々哀々と渡りけり
淋しさを知る雁金の睦まじや
鳴けよ雁こゝは囚屋の空なれば
想ふ事も遙かなる身に雁遠し

◇

【昭和三年一月九日】

地球がガタンといふ響きと共に廻轉して、此間お芽出度い昭和の三年がやつて来た。

さて、お芽出度り。久さんも御年三十六歳にならせられた。君も、ふく子さんも、桂君も、公つぺいも、明坊も、皆んな間違ひなく一つだけ年をとつた事と考へる。すると、明坊は早や三つになつた十露盤だ。プツ。生意氣だ。たつた十四ヶ月のくせに。姉ちゃんの公つぺいは二年生になれさうか。マコは何年生かな。

五日のお休みに、「クツクツクツクの子守唄」の蓄音機を聞いて、公つぺいもこれを唄つてゐるかなと思つた。そこで、僕が去年の十一月末に童謡を一つ作つた事をも、ふと思ひだしたから、それを公つぺい嬢に進呈する。お年玉だよ。

多からず

白く日の照る

冬木立

うしろは汚れた

雲の幕

からすがカー／＼

啼いて行く。

三四羽

五六羽

また三羽

「風がやんだぞ

カー／＼／＼」

續いて

五六羽

また三羽

「お山が白いぞ
カア〜〜」

白く日の照る

冬木立

うしろは汚れた

雲の幕

からすがばらばら

飛んで行く。

どうだ、すてきに旨いだらう。感心したなら感心したと、次の手紙の時に「ねのちゃん」に書いて貰つてよこしな。

手紙の時にいつも俳句や歌を書いてやるのに、たまに一度位いはほめて寄越すものだよ。こんどは一回やめるけれど。

「まだ機を織つてるか」なんて、何を云ふんだい。一ヶ月きりでやめたと、夏頃の手紙に詳しく書いたぢやないか。もうあれはこりこり。

「大晦日の思ひ出」は面白く讀んだ。さつするところ、近頃また米屋に借金が拂へないな。呵々。ふく子さん、手紙有難う。次回のを楽しく待つてゐます。

年末、體重十四貫弱。あんまりふえてもゐなかつたつけ。風邪引かず、凍傷出來ず、痔はほんの少し痛い、胃病は慢性、お正月のお餅を食ひ残した。元日からずつとお粥を食べてゐる。もう癒るだらう。

同封の手紙を姫路へ送つて欲しい。

しんねん、おめでとらう、兄さんも、姉さんも、けんいちも、ひでをも、しようぞうも、母上も、みんな、きげんよく、よきとしをおむかへなされたことと存じます。こんなところでも、やつぱり新年はなんとなくこゝろ嬉れしく、目出度く今年のおぞうにもいはひました。

私は、何のわづらひもなく、また、さむさにもめげず、きげんよく、つとめてゐます故、そのだんは御あんしん下さいませ。めかたは十三ぐわん六百目あります。ただしおやゆづりのしらがは、だいぶん多くなりました。

また時々お便りをいたします。お年の上故、さむさをおいとひ下さい。

久 太郎 拜

母 上 さ ま